

K-540

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第44集

米沢城

発掘調査報告書

1994

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第44集

米沢城

発掘調査報告書

1994

米沢市教育委員会

序文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成元年度から平成3年度までの3年度にわたって実施した「米沢城跡」の発掘調査の結果をまとめたものです。

平成元年度は2次の「ふるさとづくり特別対策事業」として行われた松が岬公園の石垣の積み替え工事に伴う調査。平成3年度（4次調査）上杉城史苑の建設工事に伴う調査。また、同年（5次調査）公衆トイレの新築に伴う調査を総括したものです。

米沢城跡の築城は、長井時代と云い伝えられています。長井氏は天授6年（1380）伊達氏8代宗遠に滅ぼされ、米沢は伊達氏の時代に入ります。実際に伊達氏が米沢を本拠としたのは、天文18年（1549）15代晴宗からと云い伝えられていますが、現在の米沢城並びに町並みがうかがえるのは慶長年間の上杉氏からであります。

米沢城はシンボルできて存在であり現在、本丸跡の木立の中には、上杉神社の祠が建ち続び、春には桜、夏には蓮、秋には紅葉、冬には雪灯籠まつりと四季それぞれの情景があり、県内外の参拝者及び観光客でにぎわい、市民の憩いの場にもなっております。

今回の調査では、中世を主体とした遺構や遺物が検出しておらず、米沢城跡を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本市は、県内でも有数の遺跡のまちとして知られておりますが、市内全域に開発が予想されますので、これらの各開発事業と埋蔵文化財との調整を図りながら保護に努力してまいります。

最後になりましたが、調査にあたって数多くのご指導、ご協力を賜りました文化庁及び山形県教育庁文化課をはじめ、関係各位の皆様に対し、衷心よりお礼を申し上げます。

平成6年3月

米沢市教育委員会

教育長 小口亘

例　　言

1. 本報告書は、米沢市教育委員会がふるさとづくり特別対策事業・松が岬公園整備工事に伴う遺構確認調査として、平成2度に実施した第Ⅱ次調査、平成3年度の第Ⅲ次調査、並びに、上杉城史苑建設に伴い緊急発掘調査として、平成3年度に実施した第Ⅳ次調査、同年、公衆トイレ建設に伴う緊急発掘調査、第Ⅴ次調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は、米沢市教育委員会が実施したものである。
3. 調査体制

第Ⅱ・Ⅲ次調査

調査総括 小関 薫（文化課長）
調査担当 手塚 孝
調査主任 菊地政信 山田 隆
調査副主任 石渡 肇
調査員 赤木博幸 原 三郎
作業員 赤木みや 五十嵐 拓 遠藤清晃 遠藤昭一
遠藤とみの 小関とき子 柴崎造 菅野泰行
田巻修一 出口孝藏 皆川清助 諸橋正一
柳町昌孝 横内昌彦 渡辺秀利
事務局 木村琢美 小林伸一 船山弘行
調査指導 山形県教育庁文化課
調査協力 大蔵省東北財務局山形財務事務所
上杉神社宮司 大乗寺 健

第N・V次調査

調査総括 小 関 薫（文化課長）

調査担当 手 塚 孝

調査主任 月 山 隆 弘

作業員 穴沢 茂雄 安部 廣一 安部 みん 石井 よそ子
石山 一郎 伊藤 今朝治 遠藤 忠一 太田 しげ子
大地 厚 大塚 伊勢藏 加藤 三郎 加藤 文教
菊地 芳子 小浦 文吉 小関 春雄 黒田 博和
斎藤 辰雄 斎丸 寅吉 佐藤 太郎 佐藤 由佳子
沢田 トミ 沢根 英雄 島貫 六助 白井 初雄
戸田 ちよ 戸田 ひさ子 平間 澄 松本 三郎
皆川 清助 柳町 昌孝 渡部 典子 岩田 雅樹
岩越 友靖 内田 充 上村 豪将 小野寺 弘貴
太田 嘉和 木村 匠克 小関 武史 庄治 正学
飛内 昭人 高橋 尚裕 滝本 勝則 津田 宣弘
平賀 博之 藤村 徳寿 前田 康夫 皆川 修二
南田 知厚 築取 俊樹
事務局 木村 琢美 小林 伸一 平間 洋子 菊地 政信
山田 隆

調査指導 山形県教育庁文化課

4. 掘図の縮尺は、遺構を $1/40$ 、 $1/50$ 、 $1/60$ 、 $1/80$ 、 $1/100$ 、 $1/200$ 、遺物は $1/2$ 、 $1/3$ を基本とし、それぞれスケールで示した。写真図版の遺物は縮尺不同である。

5. 本文中の挿図記号は、B Y—掘立建物跡、D Y—土壤、Z P—木枠洗場跡遺構、O Y—便所跡、N N—石組状遺構、D N—戸門跡、K Y—堀・溝跡、T Y—柱穴、P—不明ピットを示す。

6. 出土した遺物については、整理、復元し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

7. 本報告書の作成は月山隆弘が担当し、手塚 孝が総括した。責任校正は我妻淳一がその責務にあたった。

本 文 目 次

序 文 例 言

第 1 節 米沢城の概観	
1 米沢城の概要	1
2 米沢城の歴史的背景	1
第 2 節 第Ⅱ次調査の発掘	
1 調査の概要	3
2 遺構の概要	3
3 出土遺物	5
第 3 節 第Ⅲ次調査の発掘	
1 調査の概要	5
2 遺構の概要	5
3 出土遺物の概要	8
第 4 節 第Ⅳ次調査（東二の丸跡）	
1 調査の経過	15
2 検出遺構	15
3 出土遺物	43
第 5 節 第Ⅴ次調査（北二の丸跡）	
1 調査の経過	49
2 検出遺構	49
3 出土遺物	50
第 6 節 総 括	51

挿 図 目 次

第1図 米沢城本丸トレーンチ調査箇所	4
第2図 米沢城本丸乱杭配列状況	6
第3図 米沢城第Ⅱ次・Ⅲ次遺構平面図	9
第4図 米沢城第Ⅱ次調査A～Cトレーンチ遺構平面図	10
第5図 米沢城第Ⅲ次調査遺構平面図（1）	11
第6図 米沢城第Ⅲ次調査遺構平面図（2）	12
第7図 米沢城第Ⅲ次調査遺構平面図（3）	13
第8図 米沢城第Ⅱ次調査遺構平面図（4）	14
第9図 米沢城東二の丸・北二の丸跡調査箇所	16
第10図 B Y57・78掘立建物跡	18
第11図 B Y61・81掘立建物跡	23
第12図 B Y62・76掘立建物跡	24
第13図 B Y65・66・68掘立建物跡	25
第14図 B Y73・74・86掘立建物跡	26
第15図 B Y69・70・71掘立建物跡	28
第16図 B Y72・75・82掘立建物跡	29
第17図 B Y79・80掘立建物跡	31
第18図 B Y84・85掘立建物跡	32
第19図 B Y3・83掘立建物跡	33
第20図 B Y64・91掘立建物跡	34
第21図 B Y91掘立建物跡	35
第22図 O N 4・48・53・54給水施設跡平・断・側面図	37
第23図 N N50・58石組遺構、Z P 6・7木枠洗場状遺構	38
第24図 Z P 53洗場状遺構、O Y11～13、51・5便所跡平・断・側面図	40
第25図 K Y42・45・100溝・堀跡平・断面図	41
第26図 米沢城東二の丸跡建物変容図	42
第27図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（1）	45
第28図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（2）	46
第29図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（3）	47
第30図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（4）	48

図 版 目 次

図版一 本丸跡トレンチ調査状況（第二次）

図版二 本丸跡トレンチ調査状況

図版三 本丸跡トレンチ調査状況（第三次）

図版四 米沢城東二の丸跡調査区全景

図版五 米沢城東二の丸跡遺構検出状況

図版六 米沢城東二の丸跡出土遺物（一）

図版七 米沢城東二の丸跡出土遺物（二）

図版八 米沢城東二の丸跡出土遺物（三）

図版九 米沢城東二の丸跡出土遺物（四）

図版十 米沢城東二の丸跡出土遺物（五）

図版十一 米沢城東二の丸跡給水施設

図版十二 米沢城北二の丸跡

図版十三 御城下絵図

附図1 米沢城東二の丸跡遺構全体図

附図2 米沢城東二の丸跡遺構全体図

附図3 米沢城北二の丸跡遺構全体図

第1節 米沢城の概観

1 米沢城の概要

米沢城跡は、本丸・二の丸と三の丸の一部を加えた南北約560m、東西約600mの336,600m²の範囲を遺跡として登録している。米沢城に関する調査は、これまでにほとんど調査例がなかったが、昭和61年に始めて宅地造成に係る発掘調査の第1次調査を実施し、中世の遺構を検出している。その後、平成元年には、ふるさとづくり特別対策事業－松ヶ岬公園整備工事に伴う石垣の積み替え作業中に堀の側面より多量の杭列が発見されたことから、工事を中止して遺構確認を前提とした第2次調査を実施した。杭群は、城の侵入を防備する乱杭であることが判り、米沢城跡の築城の重要な手掛を示すものとして注目を集めた。翌年の平成2年には乱杭の分布状況を把握するために本丸全体を対象とした第3次調査を実施している。平成3度には、米沢城史苑建設に伴う第4次調査、同じく平成3年度の公衆便所新築工事に伴う第5次調査の過去5回の調査を実施し、所謂上杉氏の「米沢城」以前に成立した中世の遺構群が多量に確認され、米沢城成立を考える上で注目される資料が検出されている。今回の報告書は、第2次調査～第5次調査までの発掘成果をまとめたものである。

2 米沢城の歴史的背景

米沢城は白子神社の縁起によれば、長井時広によって築城されたといわれる。『米沢市史』(1944)はその説を支持しており、「文治5年(1189)頼朝奥州泰衡を征す。此時長井左衛門大江時廣供奉し、彼泰衡が興賊の武将良元が拠る御館山(羽前南陽郡中津川村)の柵を攻めて之を亡す。頼朝その功を賞し即ち当郡を賜う。此城を築く」という記事が『米沢里人談』にあることを紹介し、さらに、「時廣が今の米沢市松ヶ岬公園の地に米沢城を築きたるは四条天皇、暦仁元年(1238)の頃なりと称せらる」とある。城は、「松ヶ崎城」、「松ヶ岬城」などと称せられたといわれるが、明らかではない。上記の長井時廣が暦仁元年(1238)に築城したというのもまた明らかではない。そもそも長井氏が論功行賞により長井庄を所領したもの、果して長井氏自身がここに居住していたかについても一切不明である。『尊卑分脈』等の資料によれば、長井氏8代のうち5人は「関東評定衆」という鎌倉幕府行政機関の要職にあり、米沢に居住していたとは考えられない。

長井氏は、天授6年(1380)伊達氏8代宗遠によって滅ぼされ、米沢は伊達氏の版図に算入されたが、実際に伊達氏が米沢に居住し、ここを本拠としたのは天文18年(1549)15代晴宗からといわれており、その在城期間も17代『独眼龍政宗』といわれた伊達政宗が、天正19年(1591)に豊臣秀吉によって陸奥岩出山に転封されるまでのわずかに42年に過ぎない。

以上のことから、長井氏時代には確証はないものの、今日の米沢城の原形らしきものが造られ、その後伊達氏が何らかの手直しはあったと考えられるが、城並びに城下の様子を知ることのできる資料はほとんど無いに等しい。

ただ政宗が、天正19年(1591)に陸奥岩出山に転封される際に、米沢城下の六町(桐町、柳町、東町、立町、大町、南町)の主だった町人を殆ど「伊達御供」として一緒に移っていることから、すくなくと

もこれだけの町並はあったことは言える。

米沢城並びに町並の様子が多少分かるようになるのは、慶長年間からである。即ち、会津若松120万石の大名上杉氏が、関ヶ原の役において反徳川方についたため領地を削封され、米沢30万石として移封されてからのことである。上杉氏の所領は、出羽長井郡18万石余、陸奥伊達・信夫2郡11万石余の合わせて30万石となった。ただ問題はその間に板谷峠（750m）という峻岨を境としていることが大名として領国支配に不安定さを残したことは否めない。さらに米沢盆地は四周を山に囲まれており、交通の便に恵まれず、年貢米・特産物の江戸及び上方への搬出に大きな労力と経済的負担を負ったため、経済の発達には少なからぬ制約があった。

従って、その領国は甚だ閉鎖的な開発度の低い部類に属するものであった。このような領地において新たな生きる道を見出さなければならなかった上杉氏は、まずは府城の増築と城下の拡張に取り掛かった。上杉景勝は慶長6年（1601）11月米沢に入ると、とりあえず二の丸を普請して、これに居住した。その後、慶長9年（1604）に門・堀・櫓などの改築拡張を始め、更に慶長13年（1608）5月から外曲輪を造営し外濠を掘り、城西に掘堀川（掘立川）を穿った（上杉家記）。本丸と二の丸の修復もこの時に行なわれたと思われるが、その規模本丸四方890間、二の丸北方170間、南方180間、東方200間であった（米府寛子）。藩政を遂行する役所は二の丸に置かれた。以下、慶長13年追廻馬場、元和9年に本丸に式代、広間、台所、寛永元年に御座之間、同7年に二の丸に寺院を造営するなど、次第に城郭としての姿が整備されてきた。

城下の拡張工事は、慶長13年（1608）城郭増築と共に着手され、翌年更に大規模に行われた。慶長13年、二の丸の小城を三の丸に拡大したとき、従来二の丸の周辺にあった町屋を外濠の外に移し、その跡に家臣の屋敷を割り出した。侍屋敷の割替は慶長14年、直江兼続の指図により、平林正恒を奉行として実施された。その工事は三群から夫役を敵し、東は福田から西は館山まで、南は七軒町から北は土橋まで作業を行い、土地を平坦にしてその土を低所に運んだ。その侍屋敷に含まれるに至ったのである。大別して大・中身の武士は三の丸に支配され、小身のものは郭外に置かれ、その多くは城西に面して配置されていた。

以上であるが、参考のため現在知られて米沢城に関する絵図面の主なものを列挙すれば次ぎの様になる。

No.1	御城下絵図	承応2年頃	(1653)
No.2	御城下絵図	元禄7年	(1694)
No.3	御城下町割絵図	享保7年	(1722)
No.4	御城下絵図	享保10年	(1725)
No.5	米沢御城下絵図	明和6年	(1769)
No.6	御城下絵図	明和6年	(1769)
No.7	御城下絵図	文化8年	(1825)

第2節 第Ⅱ次調査の発掘

1 調査の概要

平成元年11月29日、米沢城本丸の堀上部から多量の杭列が松が岬公園整備工事の際に発見されたとの情報から調査員が現場で立会調査を実施したところ、杭の先端が尖状を示す杭列が本丸東側の土塁直下から堀にかけて存在するのを確認した。米沢城は、かつて昭和8年に米沢市が松が岬公園整備事業として堀内部に堆積したへ泥の除去作業や堀の側面に石垣を積み上げる工事を行っており、今回の検出した杭列もその際に打ち込まれた土止用の杭列と見る指摘もあったが、杭列が水中下に存在することや杭の先端が、尖状を有することなどから、城の構築に係る施設との可能性が高く、即時に工事の中止と発掘調査で確認するように指示した。

発掘調査は、関係機関との協議の上で、平成元年度の工事範囲を対象に平成元年12月25日から平成2年1月22日の日程で実施することとした。調査の方法はトレンチ調査を基本とし、工事によって破壊された東側に関しては、大手門付近の現存する箇所に $2\text{m} \times 3\text{m}$ のAトレンチ。北側に関しては、隅櫓「御三階」の存在した直下に $5\text{m} \times 3\text{m}$ のBトレンチ、同じく隅櫓から折部のコーナ部に沿って $5\text{m} \times 3\text{m}$ のCトレンチ、直行する西側に $5\text{m} \times 2\text{m}$ のDトレンチを設定した。

2 遺構の概要

○ Aトレンチ『第3図・第4図』

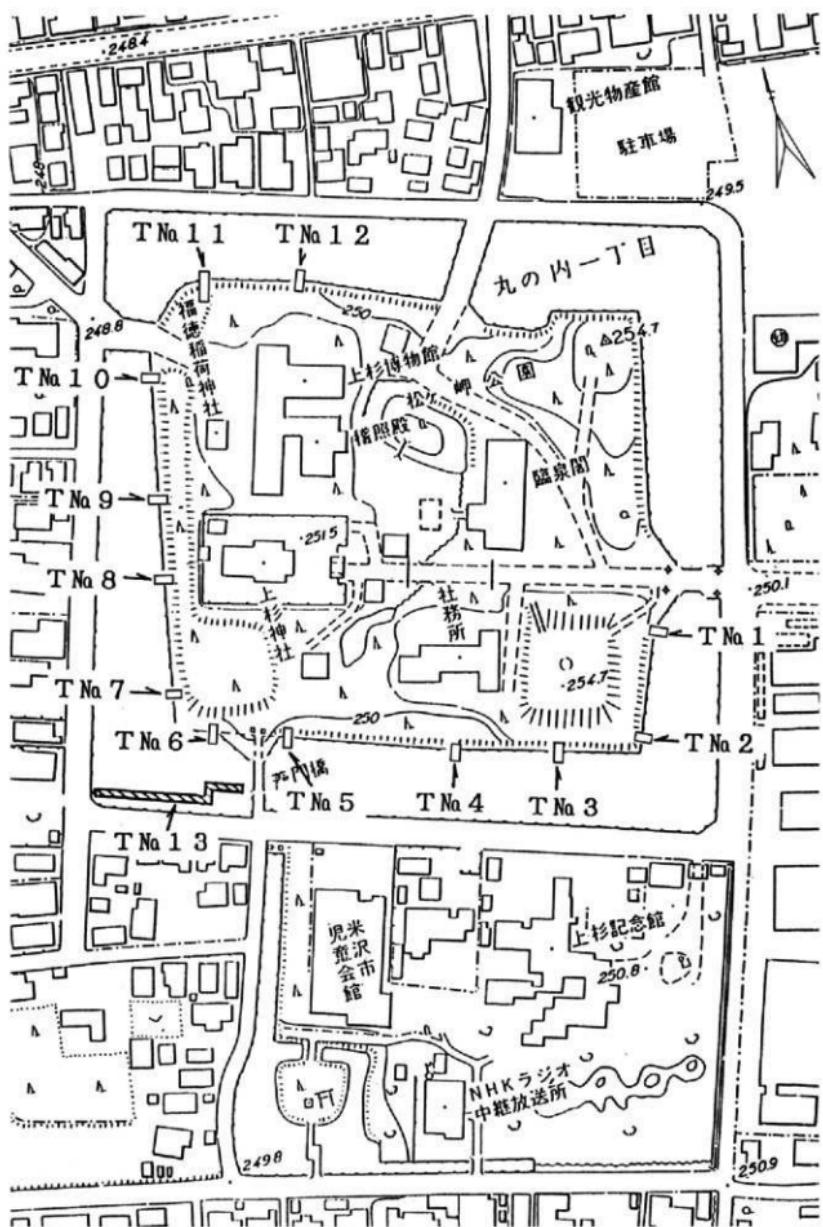
厚い板状の杭と半円形の丸太、それに丸太が検出されている。板状の長方形の杭は長さ30cm、厚さ4cm前後をの材を利用し、丸太は太さ10cm位の松材を使用している。板状の方形杭は、土塁側面に多用し、丸太は堀内部にそって認められている。規則性がないことからすれば、後世の段階で抜き取られた可能性がある。

○ Bトレンチ『第3図・第4図・第1図版』

土塁の直下に土塁の崩れを防ぐ土止用と推測される杭列を二重に配し、内側に横木を設置している一方、堀の縁辺から堀内部に沿って先端が尖状を有する乱杭を四重に配置している。乱杭は、最大で20cmを示すものから5cm前後の細杭まで乱雑に打ち込まれているが、後世に補強されたものと理解される。さらに、堀の内部から乱杭の側面にかけて斜めに太い杭を打ち込んでいるが、これらは軟弱な地盤を補強するとともに、乱杭の崩壊を防止したものと考えられる。一部、親ちぎって断面を観察したところ、土止杭は約1.5m、乱杭は1.2m、斜杭は2mほどの深さにまで達していることが判った。

○ Cトレンチ『第2図・第3図・第1図版』

隅櫓の折とはほぼ同じく直角に杭列が配されており、堀側に乱杭を四重に内側に縦板と杭を用いた土止めの二重構造とし、さらに土塁との空間に河原石を密に敷詰めたテラス状の段「犬走り」で構成しているのが特徴である。杭列は、異常に騎接していることから、後世の段階で周期的に修復したものと推測



第1図 米沢城本丸トレント調査箇所

されるが、基本的な構造は、土墨寄りから土止用杭列、乱杭2列、乱杭の崩壊を防ぐ土止用杭と考えられる。乱杭は堀に面した方が太い杭で配列していることや細い杭に関しては、打ち込まれた乱杭の状況から推測すれば、後世になって配列した可能性が高く、初期の段階では一列で構成していたものと推測される。さらに、C・Dトレンチ内の犬走りに関しては、先のA・Bトレンチには存在しないことから判断すれば、隅櫓の西側から北西隅櫓の東側に面した折の部分にのみに存在したものと考えられる。

○ Dトレンチ『第3図・第4図・第1回版』

Cトレンチと同様に杭列を四重に配し、犬走りを有している。特徴として、堀に近い乱杭は15cm前後の太い杭を50cm位の間隔で配し、間を埋める様に5~8cmの細い乱杭で構成するもので、乱杭の補強もしくは構成に修復したものと推測される。

3 出土遺物

酸化焰焼成を有した素焼のかわらけの破片が乱杭の隙間より15点出土している。その他、乱杭の上部に堆積した土層より近世から現代にかけての陶磁器類が約70点認められている。かわらけは黄赤褐色を示す直径10cm前後の皿が大半で、器高が2cm未満のものが中心で、他に高台を有する杯状の皿も3点検出された。概ね、15~16世紀前半の時期と想定される。

第3節 第III次調査の発掘

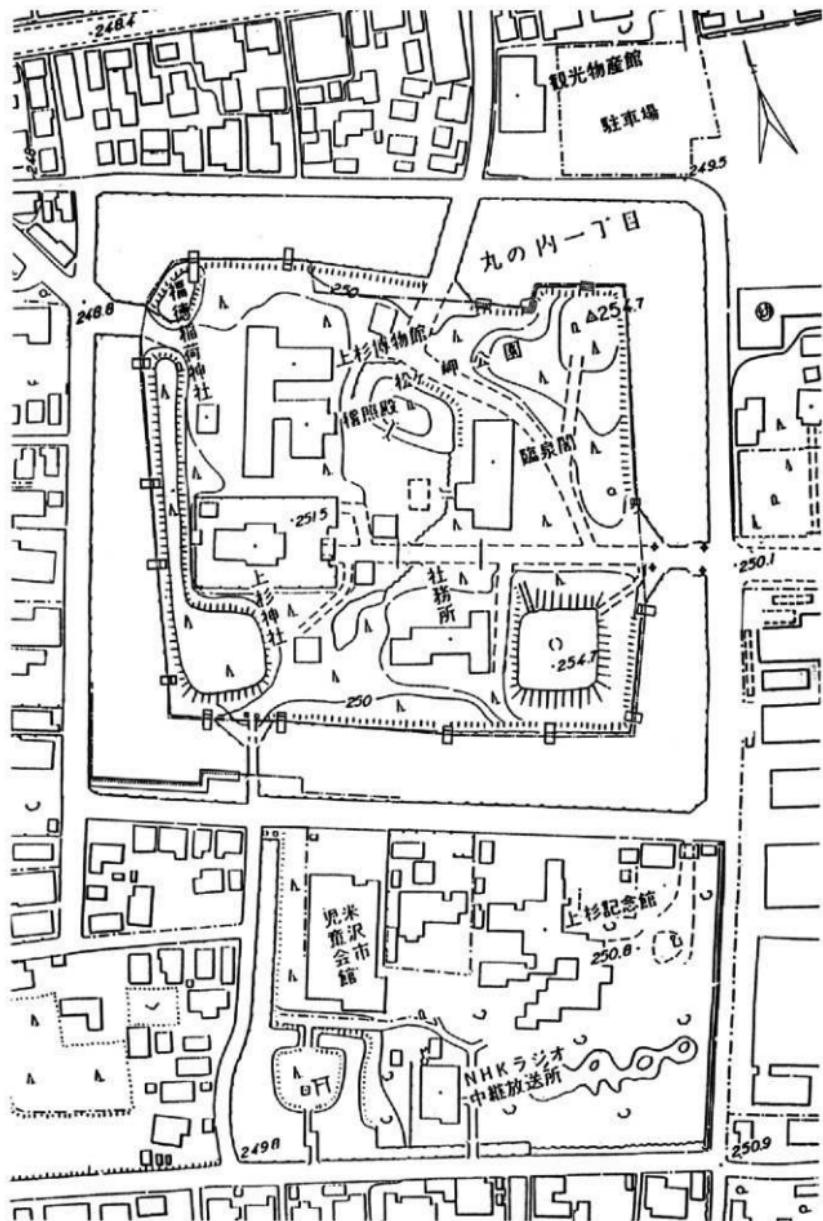
1 調査の概要

第2次調査で確認した杭の状況から、杭列群は米沢城の防備に係る乱杭の可能性が濃厚となった。今回はさらに、杭列群の残存状況を明確にし、今後の工事手法や保存方法を検討する資料を得る目的で米沢城全体を対象に調査を実施したものである。調査は2mトレンチを基本にし、東側からTNo.1・TNo.2の2トレンチ、南にTNo.3~TNo.6、西にTNo.7~TNo.10、北にTNo.11・TNo.12の2トレンチと堀の南側にも杭列が認められることから拡張区として4m×8mのトレンチを6区、4m×4mのトレンチを2区、4m×10mのトレンチ1区の計総延長66mのTNo.13を設定し、平成2年6月14日~同年7月11日の日程で行った。

西側と南側のトレンチが既工事の影響で一部の杭が抜き取られていた箇所が認められたものの、ほぼ全域にわたって杭列を確認することができた。米沢市教育委員会では、この杭列群について指導を得るため、文化庁・県文化課と協議と調整を行い、平成2年9月13日に文化庁記念物課 服部英雄調査官、山形大学教養学部 仲野 浩教授及び県文化課に米沢城の第2次調査現場の杭列群を視察していただきた。

2 遺構の概要

今回のトレンチ調査で確認された杭列群は、基本的に犬走りを挟んで土墨直下に配するものと堀の直上



第2図 米沢城本丸乱杭配列状況

に配する両者で構成している。ここでは便宜的に土壌側の杭列をA、堀側の杭列をB、犬走に相当する部分をC、出土遺物をD、特徴、その他をEとして簡単に説明を加えたい。なお、TNo.13を除く他は2mトレンチを用いたが、植栽の関係で特に土壌寄りに関しては調査が十分でない箇所もある。

○ TNo.1 トレンチ (2m × 4m) 『第1図・第3図・第2図版』

A=既工事によって若干破壊されているが、2重に配されているのが確認された。B=工事によって破壊を著しく受けおり、6本が散在するのみである。C=破壊されて確認できなかった。D=近世以降の陶磁器が数点出土している。

○ TNo.2 トレンチ (2m × 3m) 『第1図・第5図・第2図版』

A=工事によって大半が消滅しているが、乱杭の一部と推測される3本が認められた。B=基本的に三重で構成し、後世の修復とみられる細杭を密に配してある。C=破壊もしくは認められなかった。D=かわらけ1点と近世陶磁器20点が検出されている。

○ TNo.3 トレンチ (2m × 5m) 『第1図・第5図・第2図版』

A=工事によって消滅。B=工事によって破壊を受け3本のみが認められた。C=平坦面として確認できる。D=近世～現代の陶磁器30点。

○ TNo.4 トレンチ (4m × 4.6m) 『第1図・第5図・第2図版』

A=未調査のため確認できなかった。B=工事で若干破損しているが、原形を留めている。C=基礎部分の河原石が配置されている。D=近世から現代にかけての成島焼、平清水焼等を中心に約30点検出されている。E=Aの土壌側の杭列は破壊されている可能性がある。

○ TNo.5 トレンチ (2m × 4m) 『第1図・第5図・第2図版』

A=工事によって約半分の杭列が現存している。B=工事によって抜き取られ、工事用の横木として転用している。C=破壊されて確認されない。D=近世から近代の陶磁器15点、不明木製品6点が認められた。

○ TNo.6 トレンチ (2m × 3.5m) 『第1図・第6図・第2図版』

A=工事の際に大部分が抜き取られ、工事用の横木として再利用されている。B=ほぼ20cmの間隔で3列に配置されている。中央の細い杭列は、後世による修復と推測される。C=破壊されて確認できなかった。D=近世初頭のかわらけ4点と近世～現代の陶磁器30点が犬走付近から検出されている。

○ TNo.7 トレンチ (2m × 3.7m) 『第1図・第6図・第2図版』

A=未調査で確認できなかった。B=中央に横板を配し、前後2列の4重に乱杭を設置している。存在しないものとみられる。C=不明。D=江戸初期(17世紀初頭)のかわらけ5点と近世～現代の陶磁器10点が認められた。

○ TNo.8 トレンチ (2m × 4.5m) 『第1図・第6図・第2図版』

A=工事によって破壊。B=工事によって破壊、1本の乱杭だけが存在している。C=テラス状に約1.5mの幅で確認された。D=江戸初期のかわらけ20点、近世～現代の陶磁器(伊万里系、成島、相馬、本郷焼)50点、現代(明治～大正)の瓦45点等が覆土より検出されている。

○ TNo.9 トレンチ (2m × 4.5m) 『第1図・第6図・第3図版』

A=工事によって破壊。B=工事によって破壊されている。C=テラス状に確認される。D=江戸初

期と推測されるかわらけ30点、近世～現代の陶磁器30点、現代の瓦24点。

○ TN10トレンチ（2m×4.7m）『第1図・第7図・第3図版』

A=工事によって約半分が抜き取られ、土止用の横木に転用されている。B=工事によって破壊。C=破壊されて確認できなかった。D=近世～現代の陶磁器20点。

○ TN11トレンチ（2m×10m）『第1図・第7図・第3図版』

A=土墨直下に明瞭に確認できた。10cm～15cm前後の丸太を3重に打ち込んで、土墨寄りに横板を設置しているのが特徴である。B=工事で半数以上が消滅しているが、ほぼ原形を留めている。横木でBの杭列を区画して構成している。D=かわらけ10点、近世～現代の陶磁器20点、不明木製品8点、現代の瓦4点。

○ TN12トレンチ（2m×4m）『第1図・第7図・第3図版』

A=TN11と同様に土墨直下に横木を配し丸太を打ち込んでおり、杭の隙間を埋めるように横板材を使用するなど土止の杭列としての基本形態と推測される。B=Aの土止用杭列に直行して斜めに配するのが特徴で、15cm～20cmを超えるような太い乱杭を有するものであり、このトレンチのみに確認された。C=Bの乱杭の側面を利用して構築しているものと考えられる。D=近世～現代にいたる陶磁器約40点、下駄1点を含む不明木製品10点が乱杭付近より検出している。

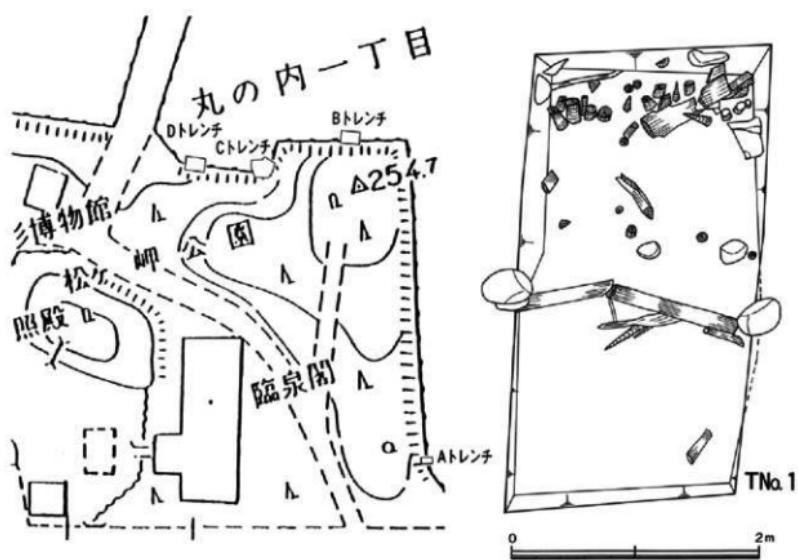
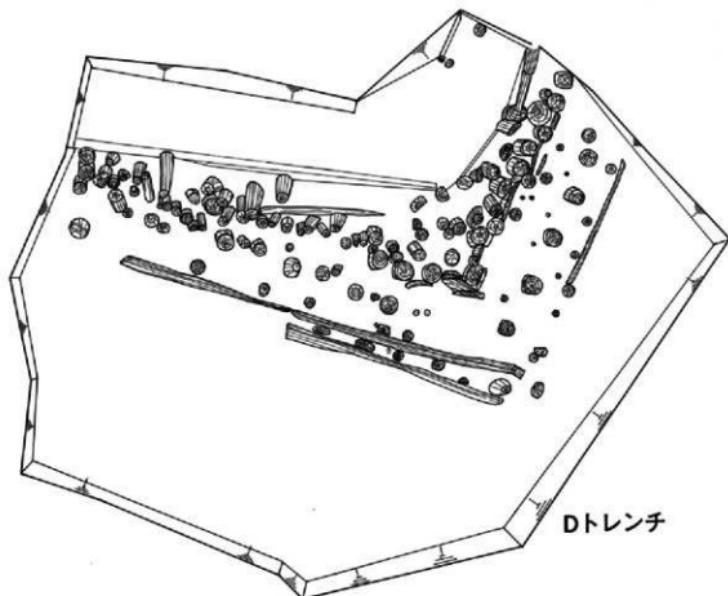
○ TN13トレンチ（4m×66m）『第1図・第8図・第3図版』

A=トレンチの一部を除けば、ほぼ原形で存在している。赤松、コナラ、栗材を利用した丸太に一部、角材や板材もみられる。丸太の大半は、多角形に整形したものが特徴で、Bの杭列よりも一回太い15cm前後が主体となっている。B=部分的に消滅している箇所もあるが、ほぼ原形を保っている。二重の杭列は、比較的細いことと規則的に配置していないことから、後世のある段階で修復用として打ち込まれたものと考えられる。C=存在しない。D=17世紀代のかわらけ25点、近世から現代の陶磁器258点。

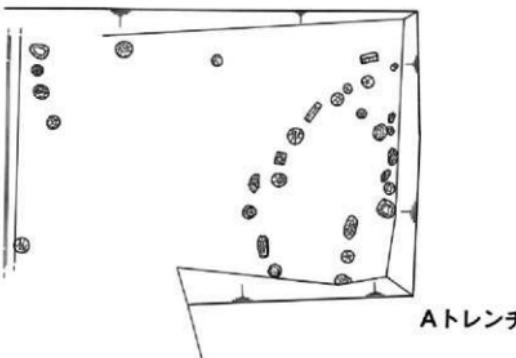
3 出土遺物の概要

今回の調査で検出された遺物は、18世紀～19世紀にかけての陶磁器類が大半で、伊万里系を筆頭に平清水、会津本郷、相馬焼等の茶碗、徳利、急須、鉢、小皿、土瓶のほか地元成島焼の製品として長頸壺、甕、摺鉢がみられた。注目されるものとしては、城の創建期に近いと考えられるものとしては、酸化焰焼成を有するかわらけ類が75点出土していることである。これらのかわらけ類のほとんどは本丸の北側及び西側に集中して認められたもので、大半は破片であるが器形の特徴から次ぎの3類に分類される。

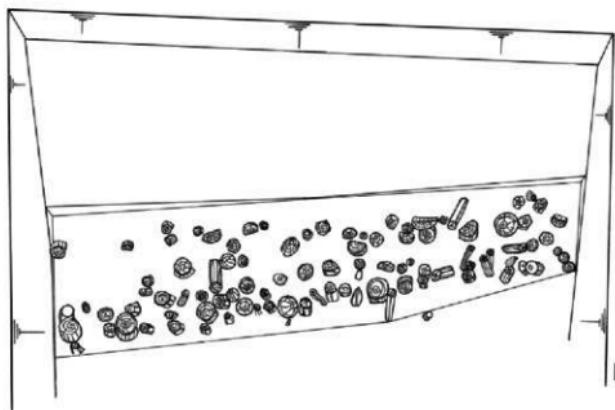
まず、赤黄褐色をなし、焼成が良好で器高の低い10cm前後の口径を示すA類。赤褐色を有し、器高が比較的発達している12cm前後の口径を示す杯形に近いB類。淡い黄褐色を有し、口径が8cm前後の皿状を示すC類に分類することができる。年代的には問題があるが、A類は概ね17世紀中頃、B類が16世紀末～17世紀前半頃、C類が18世紀代とみて間違いないものと考えられる。その他の遺物としては、明治～昭和にかけての陶磁器類と近世と推測される高足駄1点とはぞ穴を有する木製品等が検出されている。



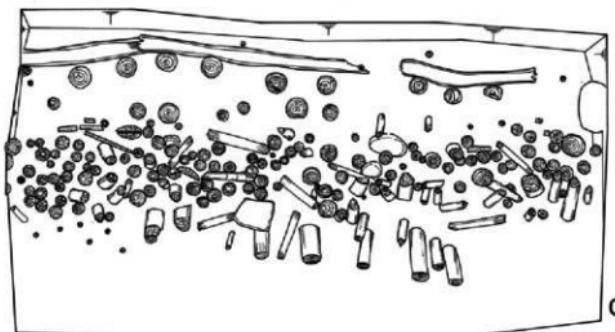
第3図 米沢城第Ⅱ次・Ⅲ次造構平面図



A トレンチ



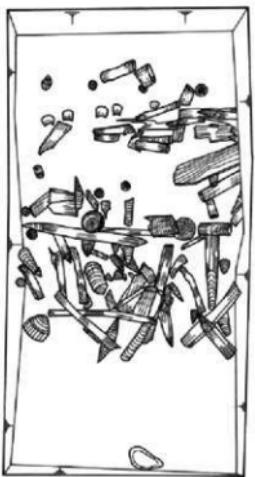
B トレンチ



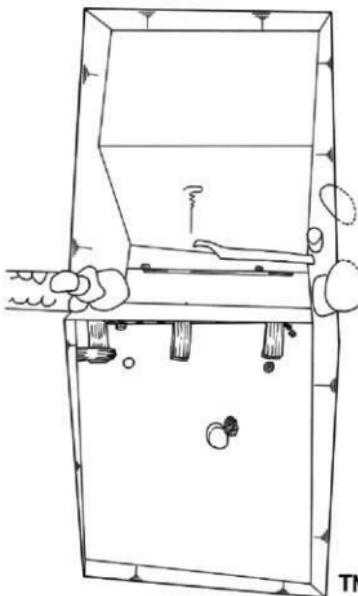
C トレンチ

0 2m

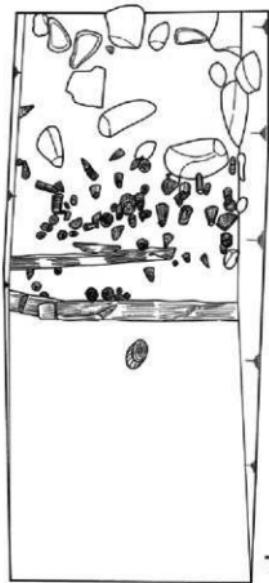
第4図 米沢城第II次調査A~Cトレンチ造構平面図



TNo. 5



TNo. 3



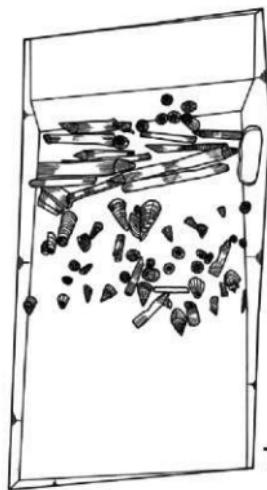
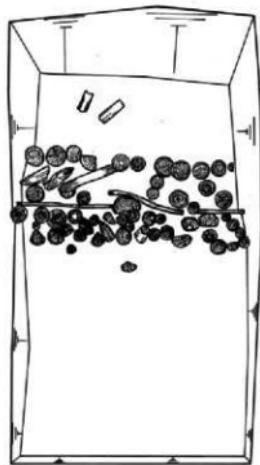
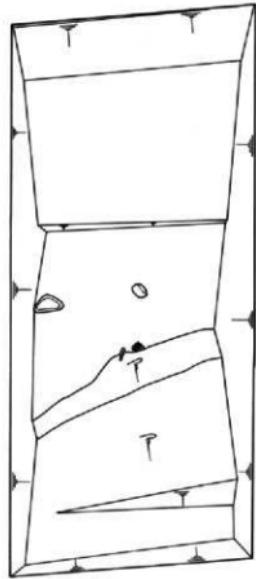
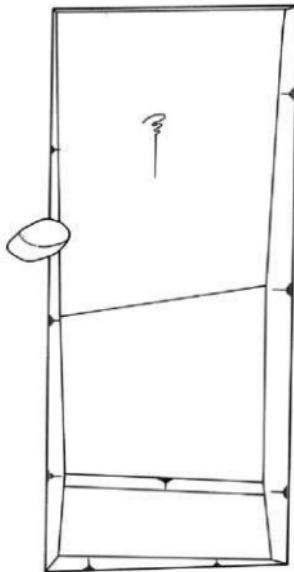
TNo. 4



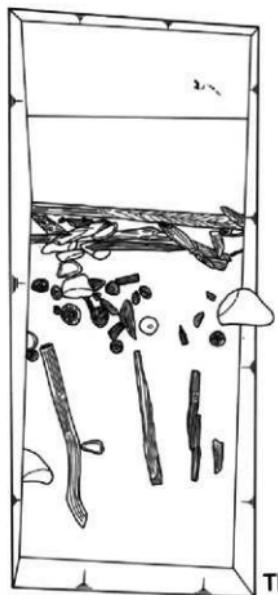
TNo. 2



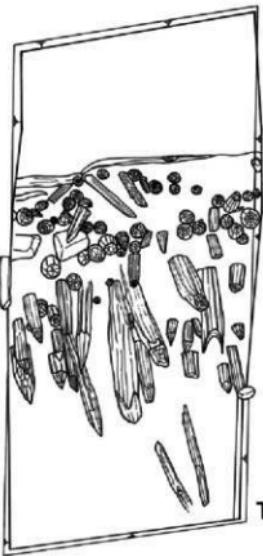
第5図 米沢城第III次調査造構平面図(1)

TN₆TN₇TN₈TN₉

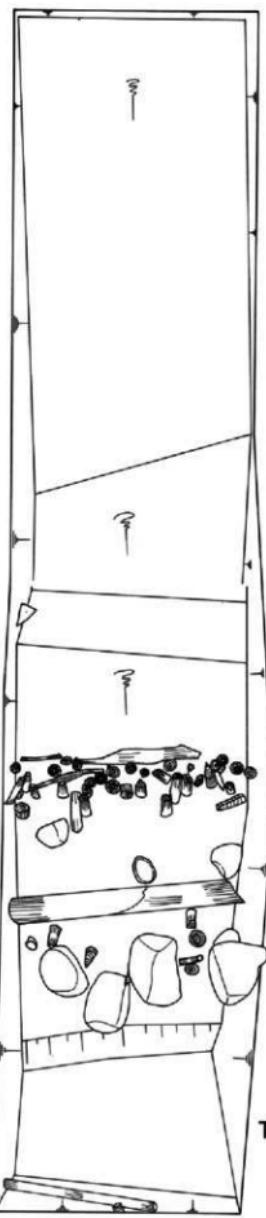
第6図 米沢城第Ⅲ次調査発掘平面図(2)



TNo.10

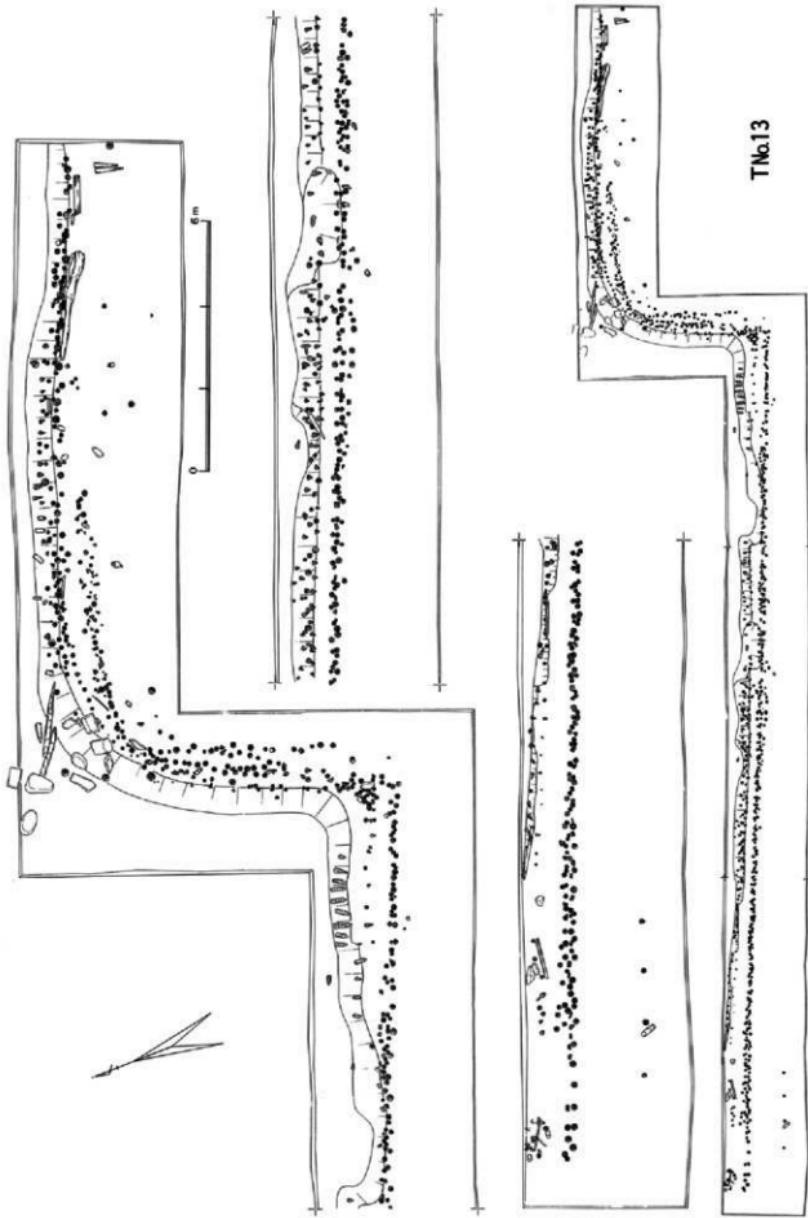


TNo.12



TNo.11

第7図 米沢城第Ⅲ次調査遺構平面図(3)



第8図 米沢城館Ⅲ次調査諸構平面図(4)

第4節 第Ⅳ次調査（東二の丸跡）

1. 調査の経過

今回の調査に先行し、上杉城史苑建設に伴う事前調査として平成2年11・12月に詳細な分布調査（試掘トレンチ2m×90mを5本）を実施した。その結果、開発予定地全域に遺構・遺物の存在が確認された。調査区予定内の駐車場に関しては、大半が二の丸の堀部分に加わることや工事手法が土盛りを中心として進めるもあり調査対象から除外し、これらを基に残る3,000m²を調査対象として、5月28日から調査を開始した。

まず始めに、調査を効率よく進めるために、調査区内に8m×8mのグリッドを真北に設定し、このグリッドを基本単位とした。

表土剥離は、元東南置賜地方事務所跡の建材などや整地のための碎石などが覆われているため、重機を用いることとし、5月末から慎重に作業を進めた。その後、南側から順次面整理、面精査、遺構確認、遺構の掘り下げ、遺物の取上げなどをグリッドごとに進めた。

精査の結果、柱穴、土壌、給水施設、洗い場状遺構、トイレ跡などが確認された。これらの遺構は、掘り下げ（半裁）などの後、埋土の堆積状況の図面作成や写真撮影を随時行った。

8月からは、二の丸堀の確認と掘り下げを実施し、9月17日に遺跡全体の航空写真撮影を行い、9月20日に現地説明会を開催し、現地調査を終了した。

2. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構には、掘立建物跡（礎石建物跡含）27棟、土塙37基、給水施設跡5基、洗い場状遺構4基、溝21状・堀跡1基、便所跡5基、柱穴、不明ピット数百基などがある。しかし、これらの建物跡等は後世の建替えによって破壊されており、明瞭に構成するものは少なく、成立しない柱穴が大多数である。掘立建物跡は柱穴の状況から100棟以上構築されていたのものと考えられるが、ここでは確実に成立する27棟を前提としている。これらの遺構（掘立建物跡）の時期は、KY42溝跡（薬研堀）を前後とする切り合い関係より8期に分類される。他の土塙・溝跡については、時期を位置づける出土遺物はほとんど認められなかったが、近世から近代の構築であることから翻愛した。以下、古い順から主な遺構について述べたい。

〈I 期〉

I期の建物跡は、調査区の中央部西側に東西と南北方向に斜めに配置されて確認したもので、桁行が東西方向を有している。東西3・4間、南北2・3間、柱間6・7尺の建物で、掘り方の平面形状はほぼ橢円形を呈し、径30cm前後を測る。規模は比較的小さく、柱穴の埋土は炭化物を含む黒色土を主体とするもので、埋土は泥炭質の土砂であった。これらの建物跡は、KY42溝跡と並行して存在しており、5層上面を堀り込んでいる。14世紀頃に位置するもので3棟が確認された。今回の建物跡の中では最も古いグループである。



第9図 米沢城東二の丸・北二の丸跡調査箇所

B Y57掘立建物跡（第10図）

調査区西側18~19~14~15G、B Y78の東側に確認された。（桁行）東西（2）間、（梁行）南北3間を呈す。東側は削平されており不明である。柱間1.7~2.0mを測る。堀り方の平面形は橢円形を呈し、径30~40cm、深さ20~30cmを測る。建物の方位はほぼ真北のN-1°-Eを示す。

B Y62掘立建物跡（第12図）

調査区西側8~12~12~14Gに確認された。桁行東西3間、梁行南北2間を呈し、柱間1.8~2.0mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径33~45cm、柱の痕跡はT Y178・182に確認されており、直径約15cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ28~36cmを測る。梁行は真北を示す。F Y8と重複しF Y8に切られる。

B Y66掘立建物跡（第13図）

調査区南側16~18~19~21Gに確認された。（桁行）東西2間、（梁行）南北（2）間を呈す。北側は、削平されており不明である。柱間2.0~4.0mを測る。堀り方の平面形状は円形または橢円形を呈し、径40~55cm、柱の痕跡はT Y202・203に確認されており、直径約20cmを測る。堀り方の埋土は2層からなっている。深さ32~46cmを測る。N-5°-Eを示す。B Y65と重複しB Y65に切られる。

K Y42溝跡（第25図）

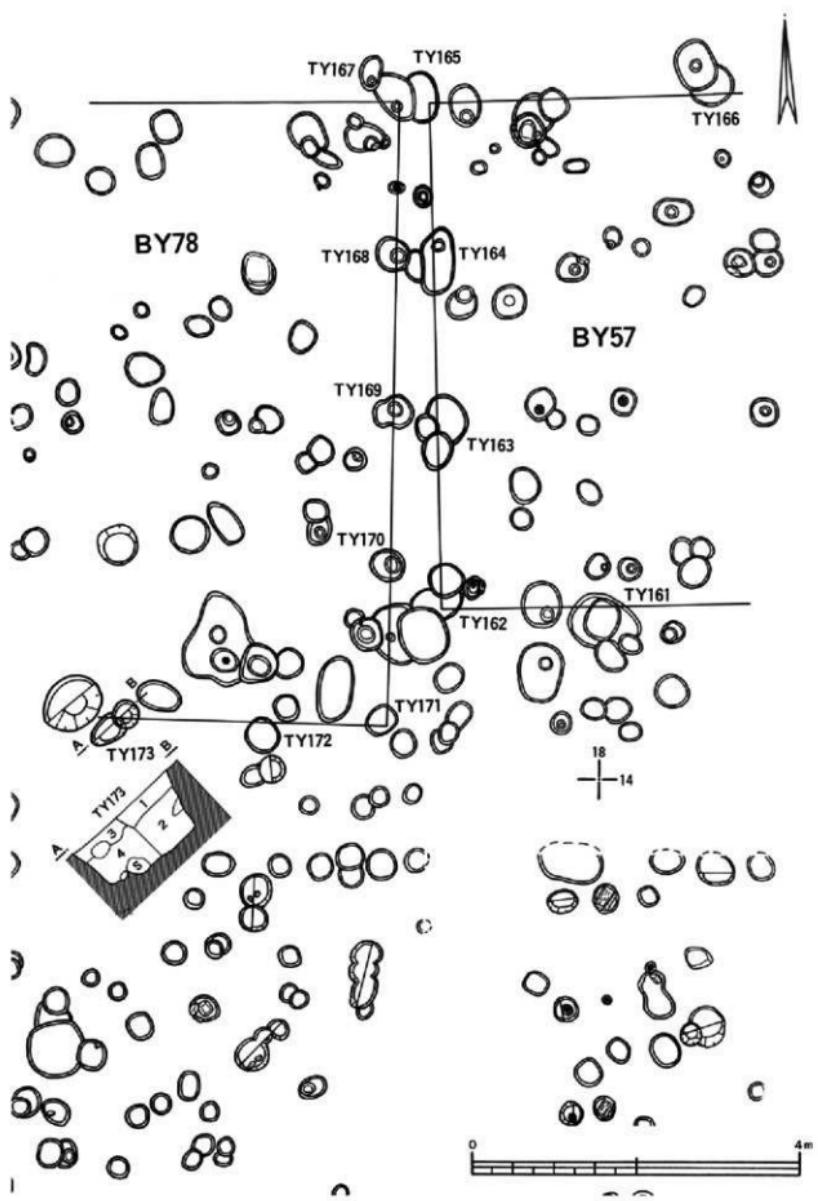
調査区北側6~22~23Gに確認された。幅1.4~1.9m、深さ1.2~1.3mを測る。東西方向に一直線に延びており、断面形はV字状を呈する中世期の薬研掘である。底面はほぼ平坦で、壁面は底部から垂直に近い立上り、上部で若干緩やかになる。西側より東側が若干深くなっている。覆土は8層に分けられ自然堆積と判断される。出土遺物は、底部から手堀りの瓦器、同鉢かわらけ、綠釉菊花文などがある。

〈II 期〉

この時期の建物跡は、中央部西側に南北方向に配置されて確認したもので、東西（3）間南北（4）間、柱間6・7尺の建物で、掘り方は橢円形及び不整形を呈し、径30cm前後を測る。4層下面を堀り込んでいる。I期の建物跡の桁行が東西方向を構成しているのに対し、南北方向に配して建て替えた中規模の建物の特徴があり、1棟のみが確認された。K Y42溝跡に並行して存在し、14世紀頃の建物跡と判断される。

B Y69掘立建物跡（第15図）

調査区西側6・7~16~20Gに確認された。（梁行）東西（1）間、（桁行）南北（4）間を呈す。西側は調査区外であるため未確認であり、北側は削平されており不明である。柱間1.8~2.0mを測る。堀り方の平面形は橢円形を呈し、径30~65cm、柱の痕跡はT Y207・208に確認されており、直径約10cmを測る。堀り方の埋土は4層からなっている。深さ22~34cmを測る。N-10°-Wを示す。B Y70・71と



第10図 BY57・78掘立柱建物跡

重複している。

〈III 期〉

この時期の建物跡は、西側に東西方向及び南北方向に配置されて確認したもので、東西が2~3間、南北が4~6間、柱間を6~7尺を有する建物で、掘り方は梢円形を呈し、柱穴は径30~40cmを測る。II期と同様に建物跡は、桁行が南北方向を配している特徴があり3棟確認された。KY42溝跡に並行して存在する建物跡で、15世紀頃に位置するもと判断される。

B Y71掘立建物跡（第15図）

調査区西側6~9-14~18G、B Y78西側に確認された。梁行東西3間、桁行南北6間を呈し、柱間1.6~2.0mを測る。堀り方の平面形は梢円形を呈し、径36~40cm、柱の痕跡はTY221~223・225・227を除く全て確認されており、直径約10~30cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ26~38cmを測る。N-9°-Wを示す。B Y69・70・FY8と重複している。

B Y78掘立建物跡（第10図）

調査区西側17-18-15G、B Y71東側に確認された。西側は削平されており不明であるが、（桁行）東西2間、（梁行）南北4間を呈し、柱間1.8~1.9mを測る。堀り方の平面形は梢円形を呈し、径36~40cm、柱の痕跡はTY171・172を除く全てに確認されており、直径約20cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ30~42cmを測る。N-3°-Eを示す。

B Y86掘立建物跡（第14図）

調査区西側7~10-7~12G、B Y71北側に確認された。南側は削平されており不明であるが、桁行南北（3）間、梁行東西（3）間を呈し、柱間1.6~2.0mを測る。堀り方の平面形は梢円形を呈し、径36~40cm、柱の痕跡はTY266・268に確認されており、直径約15cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ26~38cmを測る。N-8°-Wを示す。B Y73・74と重複しており双方に切られる。

〈IV 期〉

この時期の建物跡は、中央部西側に四方に配置されて確認したもので、東西（2）間南北（4~5）間、柱間6~7尺の建物で、掘り方の平面形は梢円形や不整形を呈し、30cm前後を測る。中規模の建物で、II・III期の建物跡同様桁行が南北方向を配している特徴があり、4棟が確認された。KY42溝跡に並行して存在する最後の建物跡で、15世紀頃に位置するもと判断される。

B Y65掘立建物跡（第13図）

調査区南東側の15~17-16~19Gに確認された。（梁行）東西1間（桁行）南北（2）間を呈す。北側は、削平されており不明であるが、さらに1~2間は、存在していたものと考えられる。柱間1.8~2.4mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径30~40cm柱の痕跡はTY196・197に確認されており、

直径約12~19cmを測る。堀り方の埋土は1~2層になっている。深さ32~39cmを測る。N-4°-Wを示す。BY66と重複しており、BY66に切られる。

BY70掘立建物跡（第15図）

調査区西側6・7-8~11G、BY73北側に確認された。（梁行）東西（2）間、（桁行）南北（5）間を呈す。西側は調査区外であるため未確認であり、北側は削平されており不明である。柱間1.8~2.8mを測る。堀り方の平面形は橢円形を呈し、径50~60cm、柱の痕跡はTY213を除く全てに確認されており、直径約15~20cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ30~38cmを測る。N-10°-Wを示す。TY217・218の堀り方底部には30cm前後の、平坦な河原石の礎石が認められた。BY69・71と重複している。

BY73掘立建物跡（第14図）

調査区南西側6・7-7~11G、BY70南側に確認された。（梁行）東西（2）間、（桁行）南北3.間を呈す。西側は調査区外であるため未確認である。柱間1.6~1.8mを測る。堀り方の平面形は円形または橢円形を呈し、径25~43cm、深さ33~45cmを測る。N-10°-Wを示す。BY74・86と重複しており、BY74に切られる。

BY75掘立建物跡（第16図）

調査区西側7~11-11~15Gに確認された。梁行東西2間、桁行南北4間を呈し、柱間2.0~2.2mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径22~32cm、柱の痕跡はTY242・247に確認されており、直径約10cmを測る。堀り方の埋土は2層からなっている。深さ22~30cmを測る。N-2°-Eを示す。BY72と重複している。

〈V期〉

この時期の建物跡は、南部西側に四方に配置されて確認したもので、V期の建物跡が接近した様相を呈し、東西（2・3）間南北（3）間、柱間6・7尺の建物で、堀り方は橢円形を呈し、30cm前後を測る。覆土から自然堆積を呈し、4層下面を堀り込んでいる。IV期の建物跡同様桁行が南北方向を配しているのが主体を占め、建物跡は小型になる特徴があり、5棟確認された。KY42溝跡に並行して存在する最後の建物跡で、今回の建物跡の中では5番目に古いグループである。16世紀頃に位置するもと判断される。

BY57掘立建物跡（第10図）

調査区南側17・18-15~19G、BY78東側に確認された。（梁行）東西（2）間、（桁行）南北（3）間を呈し、柱間1.7~1.9mを測る。堀り方の平面形はほぼ橢円形を呈し、径40~45cm、深さ30~34cmを測る。N-1°-Eを示す。

B Y68掘立建物跡（第13図）

調査区南側7、～9-19-23G、B Y72北側に確認された。桁行東西2間、梁行南北3間を呈し、柱間2.0～3.0mを測る。堀り方の平面形は円形及び椭円形を呈し、径38～54cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は2層からなっている。深さ31～33cmを測る。N-8°-Wを示す。

B Y72掘立建物跡（第16図）

調査区南側6～8-11-13G、B Y82西側に確認された。梁行東西2間、桁行南北3間を呈し、柱間1.3～1.5mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径38～40cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は2～3層になっている。深さ29～34cmを測る。当建物跡東側には目隠し（塀）が確認された。この目隠しは4間あり、南及び北側から2間目には、建替えの痕跡が認められ柱痕も確認されている。N-2°-Wを示す。

B Y82掘立建物跡（第16図）

調査区南側10-11-11-14G、B Y72に確認された。（梁行）東西（2）間、（桁行）南北（2）間を呈す。東側及び南側は削平されており不明である。柱間2.0mを測る。堀り方は全体的に大きく、平面形は椭円形を呈し、径42～51cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ30～35cmを測る。N-5°-Eを示す。

K Y45溝跡（第25図）

調査区北側18-22-23-32G、南東方向から北西方向に確認された。幅1.6～1.8m、深さ1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、北西側が若干低くなっている。覆土は8層確認されており、自然堆積と判断される。出土遺物は、覆土から陶磁器片が数点ある。

〈V期〉

この時期の建物跡は、西側に三角形に配置されて確認したもので、V期までの建物の構成と異なり、この時期から桁行が東西方向を配している特徴がある。東西3～5間、南北2・3間、柱間6・7尺の建物で、堀り方はほぼ円形を呈し、径30cm前後を測る。4層上面を堀り込んでおり、覆土から自然堆積を呈する。今回の建物跡の中では、三番目に新しいグループである。16世紀頃に位置するものであり、3棟確認された。

B Y74掘立建物跡（第14図）

調査区南西側6-7-8-11Gに確認された。（桁行）東西（2）間、（梁行）南北3間を呈す。西側は調査区外で未確認である。柱間2.0～2.4mを測る。堀り方の平面形は椭円形を呈し、径50～62cm、柱の痕跡はT Y255-257に確認されており、直径約15cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ53～65cmを測る。N-8°-Wを示す。B Y73・86と重複する。

B Y76掘立建物跡（第12図）

調査区西側9~14~15~17Gに確認された。桁行東西4間、梁行南北2間を呈し、柱間2.0~2.2mを測る。堀り方の平面形は円・橢円形を呈し、径30~48cm、柱の痕跡はTY185~187・190・192・193以外に確認されており、直径約10cm前後を測る。堀り方の埋土は2~3層からなっている。深さ28~35cmを測る。N-1°-Wを示す。

B Y84掘立建物跡（第18図）

調査区東側8~11~11·12Gに確認された。（桁行）東西（3）間、（梁行）南北（2）間を呈す。東・北側は削平されており不明である。柱間1.8mの6尺を測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径38~40cm、柱の痕跡はTY149に確認されており、直径約20cmを測る。堀り方の埋土は2~3層からなっている。深さ28~34cmを測る。TY147~150柱穴底面には少礫が、またTY151には30cm大の平坦な河原石が認められている。N-2°-Eを示す。

〈VII期〉

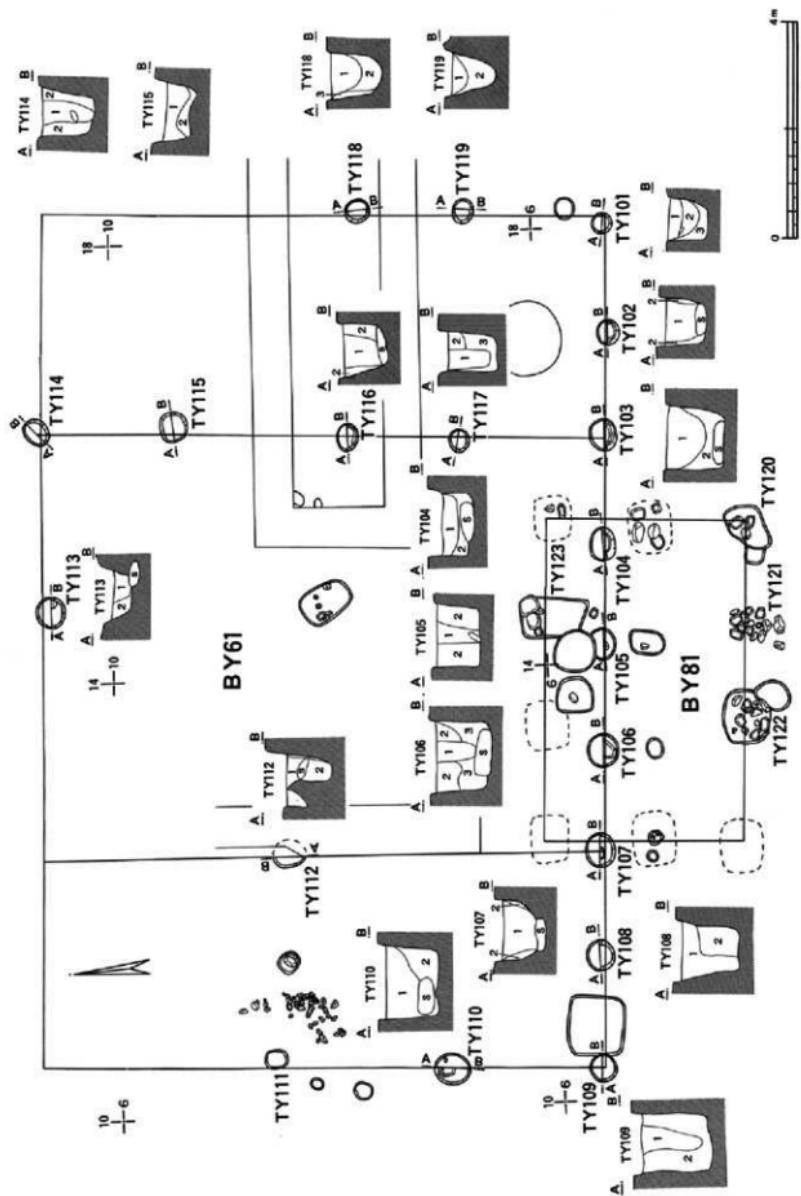
この時期の建物跡は、南西側に三角形に配置されて確認したもので、VI期の建物の形態を受け継いでおり、この時期も桁行が東西方向を配し、建物は大規模を有する。また、この時期の堀り方底部には40cm前後の平坦な河原石が埋設している特徴がある。東西5~8間、南北2·4間、柱間7·10尺の建物で、堀り方は橢円形を呈し、今回の建物の堀り方では径40~50cmと大きい。4層上面を堀り込んでおり、覆土から自然堆積を呈する。16世紀頃に位置するものであり、3棟が確認された今回の建物跡の中では、二番目に新しいグループである。

B Y3掘立建物跡（第19図）

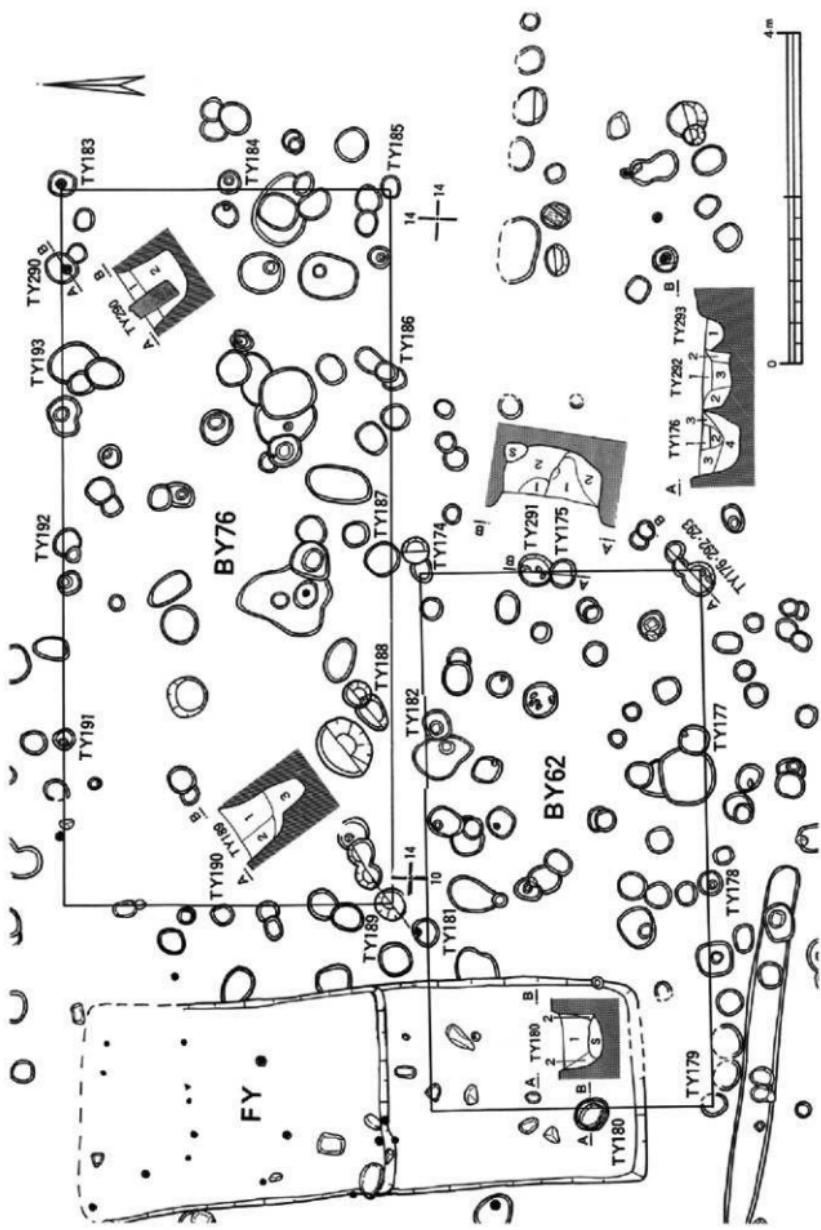
調査区中央南側19~21~12·13G、B Y61·64の東側に確認されもので、東西（3）間のみの検出である。南・北側は削平されており、特に北側は不明土壌などが密集していることから、建物の配置関係や堀り方及び礎石を有しているなどを考慮し、北側に延びる建物跡と判断したものである。柱間1.4~1.9mを測る。堀り方の平面形は円・橢円形を呈し、径42~50cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は2~3層からなっている。深さ24~31cmを測る。TY152·155柱穴底部には、平坦な河原石の礎石が認められた。N-7°-Wを示す。

B Y61掘立建物跡（第11図）

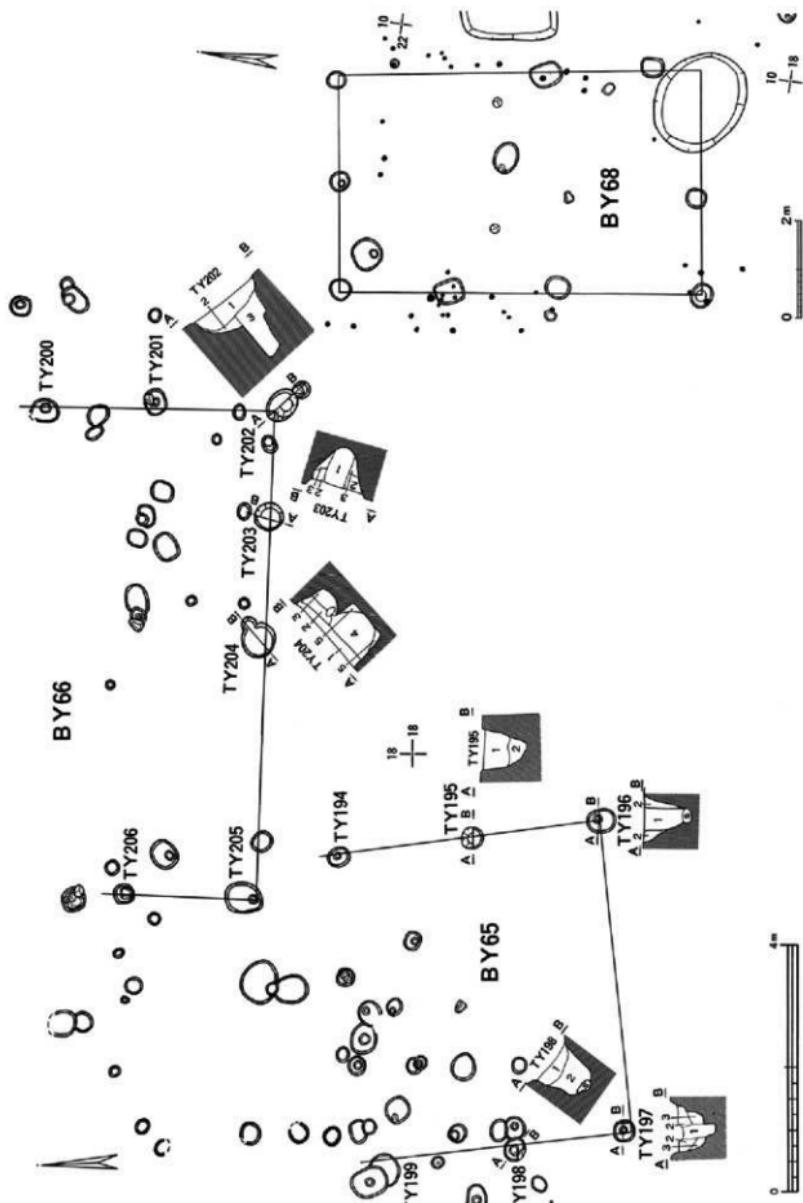
調査区南西側10~18~6~11G、B Y64南側に確認された。桁行東西8間、梁行南北（4）間を呈し、柱間1.9~2.0mを測る。東側と西側から2間目には間仕切りが施されている。今回の建物跡では、最大を有す。堀り方の平面形は橢円形を呈し、径45~64cm、柱の痕跡はほぼ全てに確認されており、直径約30~34cmを測る。堀り方の埋土は1~3層からなっている。深さ38~45cmを測る。TY101~104、106、108、110、116柱穴底部には、25~30cmの平坦な河原石の礎石が認められた。N-5°-Eを示す。B Y81と重複している。



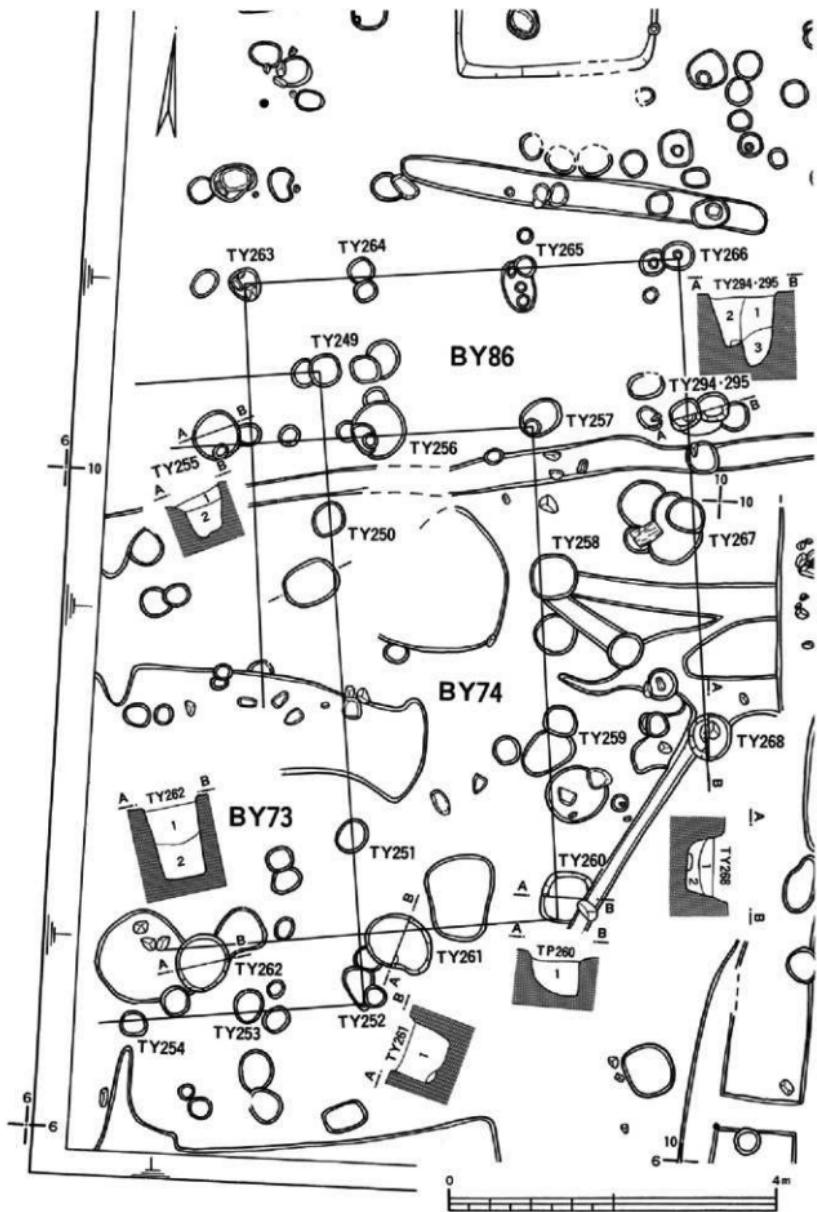
第11圖 BY61・81掘立建物跡



第12回 BY62・76掘立建物跡



第13図 BY65・66・68掘立建物跡



第14図 BY73・74・86掘立建物跡

B Y64掘立建物跡（第20図）

調査区中央西側9~15-17~20Gに確認された。桁行東西6間、梁行南北2間を呈し、柱間2.0~3.0mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径35~51cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ22~34cmを測る。TY124~136柱穴底部には、30cm前後の平坦な河原石または少疊の礎石が認められた。真北を示す。B Y91・ON53・54と重複している。

〈VII期〉

この時期の建物跡は、南側にコの字状に配置されて確認したもので、VI・VII期の大型建物から、小規模を主体とする特徴がある。東西（2~5）間、南北2・3間、柱間4~8尺の建物で、堀り方は梢円形を呈し、径20~53cmを測る。4層上面を堀り込んでおり、覆土から自然堆積を呈する。18世紀頃に位置するものであり5棟が確認された。今回の建物跡の中では、一番新しいグループである。

B Y79掘立建物跡（第17図）

調査区南側22~25-4~6Gに確認された。東西3間、南北（2）間を呈す。南側は削平されており不明である。柱間1.8~2.0mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径32~41cm、柱の痕跡はTY273~275に確認されており、直径約15cmを測る。深さ22~34cmを測る。TY273~275にはアタリが認められた。N-6°-Eを示す。

B Y80掘立建物跡（第17図）

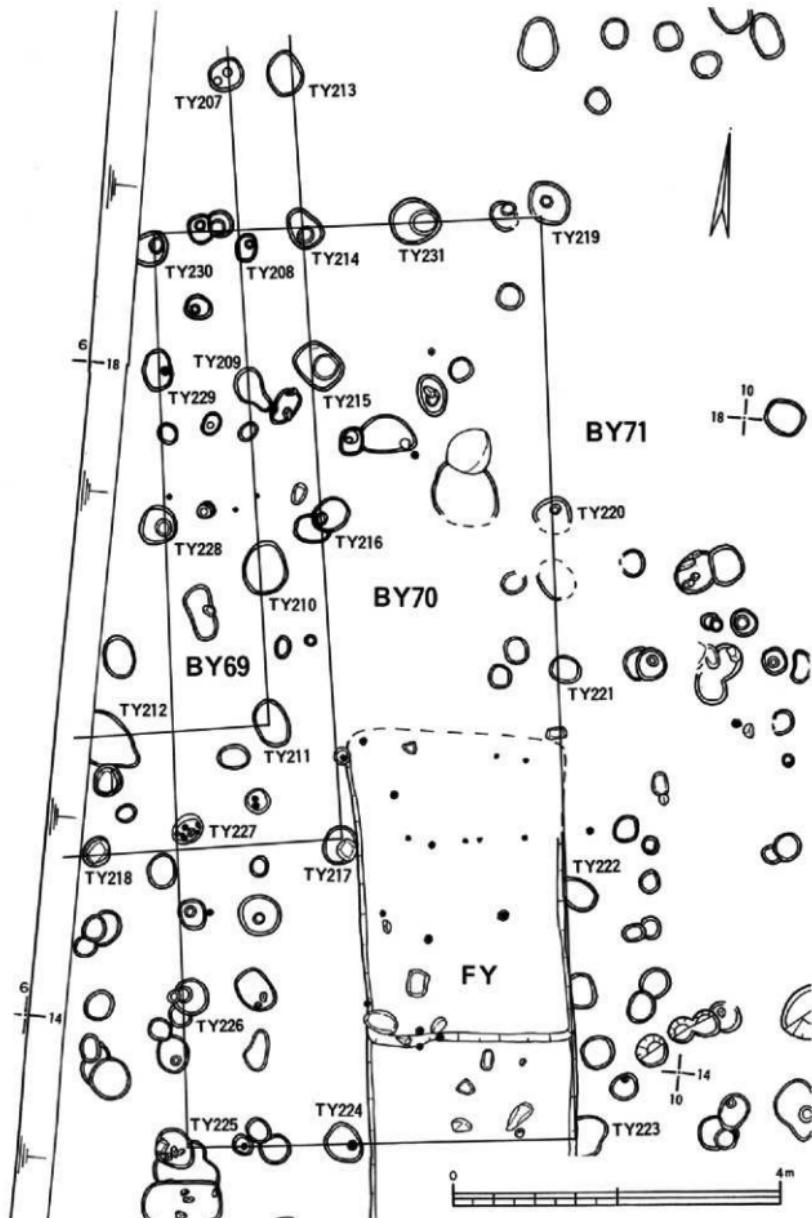
調査区南西側17~19-4・5Gに確認された。梁行東西2間、桁行南北2間を呈す。柱間1.2~2.0mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径35~51cm、柱の痕跡は確認されていない。深さ22~34cmを測る。TY276・277・282~284柱穴底部に疊が認められた。真北を示す。

B Y81掘立建物跡（第11図）

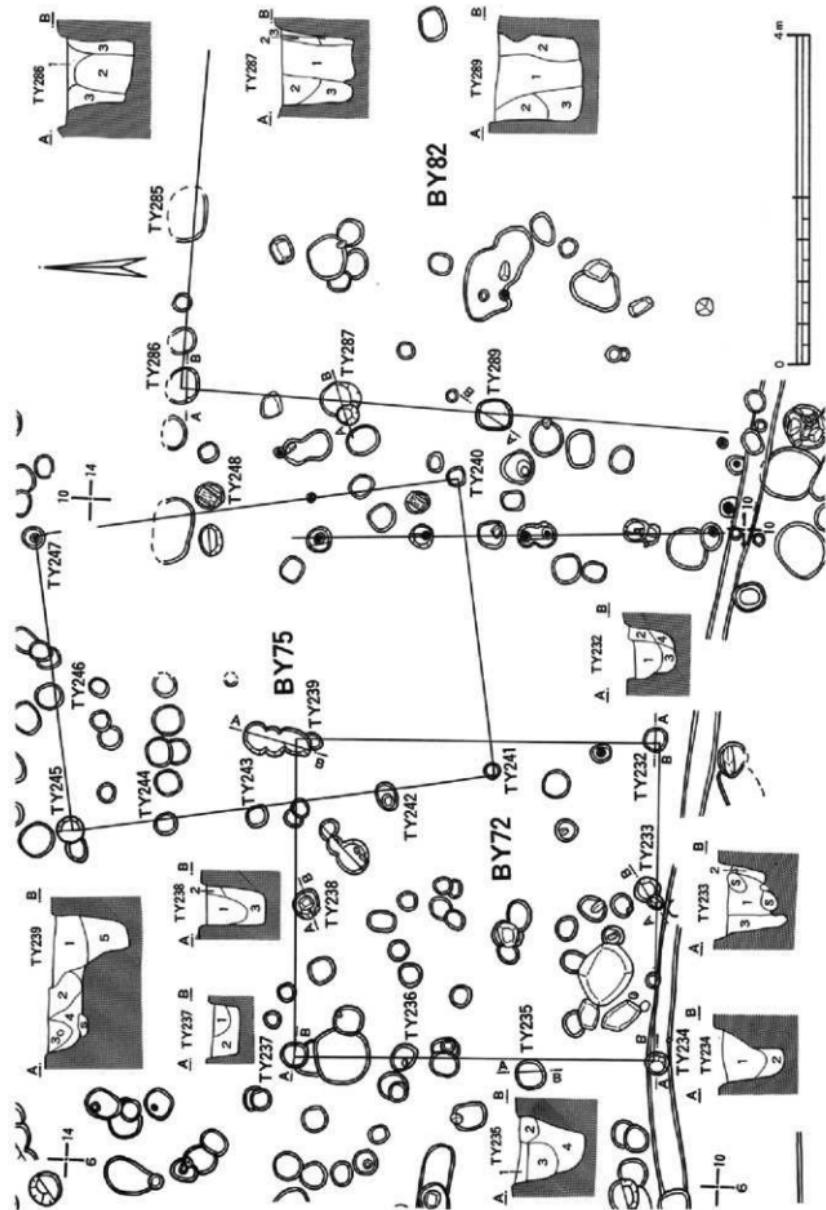
調査区南西側11~14-5~6Gに確認された。梁行東西3間、桁行南北（2）間を呈す。柱間はほぼ2.0mを測る。堀り方の上部は削平されており底部のみの確認であるが、平面形は隅丸方形を呈し、径80~100cm、柱の痕跡は認められない。深さ12~18cmを測る。TY120~123柱穴底部には、20~30cmの平坦な河原石や少疊の礎石が認められた。N-6°-Wを示す。B Y61と重複しており、B Y61を切る。

B Y83掘立建物跡（第19図）

調査区東側18~20・14~16Gに確認された。付近は削平が著しく、東西（2）間、南北（2）間を呈す。柱間1.5~1.8mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径35~40cm、柱の痕跡は認められない。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ28~34cmを測る。N-5°-Eを示す。FY9と重複している。



第15図 BY69・70・71掘立建物跡



第16図 BY72・75・82組立遺物跡

BY85掘立建物跡（第18図）

調査区西側20~22・9・10Gに確認された、OY51・52便所跡の建物である。梁行東西3間、桁行南北3間を呈し、柱間1.5~2.0mを測る。堀り方の平面形はほぼ円形を呈し、径38~54cm、柱の痕跡はTY138・141・146に確認されており、直径約20cmを測る。堀り方の埋土は3層からなっている。深さ27~31cmを測る。TY137・144・146には平坦な河原石が、またTY138・143には少疊が認められた。N-2°-Eを示す。

BY91掘立建物跡（第20・21図）

調査区西側6・11-16~17Gに確認された。桁行東西(5)間、梁行南北3間を呈す。西側は調査区外であるため未確認であり、柱間1.4~2.2mを測る。堀り方の平面形は円形を呈し、42~45cm、深さ極端に異なり1.4~3.45mを測る。これらの柱はある程度掘り込んでから、打ち込んだもので柱痕跡がほぼ完全に残っている。TY27-1・27-2及びTY32-1・32-2は柱痕の深さが浅く補強をしたものと考えられる。BY64・ZP7・ON53・54などと重複している。真北を呈す。

KY99掘跡（第25図）

調査区北側18~27-22~24G、西南方向から北東側へ、東二の丸堀に直交して確認された。幅1.5~1.9m、深さ1.2~1.3mを測る。堀り方の断面形はU字状を呈し、溝の上部及び下部には玉石や丸太材、板材、杭などを用いて土止めを施している。底面はほぼ平坦で、東側につれて緩やかに低くなっている。溝の北東側は東二の丸堀を掘り込んでおり、土止め用の枕が5本認められている。遺物の出土は認められない。

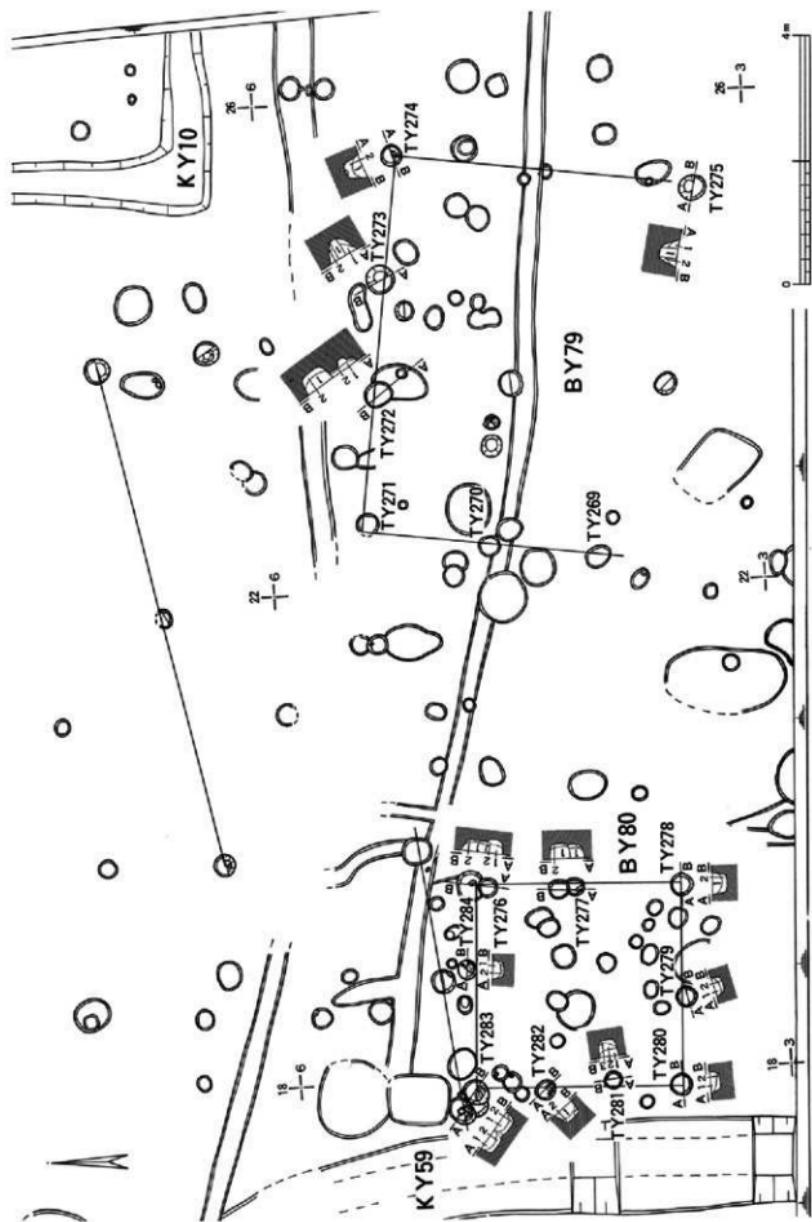
ON4給水施設（第22図）

調査区東側23~24~20Gに確認された。堀り方の平面形は東西に若干長い橢円形を呈し、1.2~1.36m、深さ1.64mを測る。この給水施設は桶を埋設しているもので、木製の桶がほぼ完全な形で残存しており、桶の底部には栓が付設する。覆土は堀り方（桶外部）が3層、内部が2層である。桶内部の覆土からは自然遺物が出土していないことから、屋内で使用されたものと考えられる。出土遺物は陶磁器、木片など数点あるが、後世に混入したものと考えられる。桶内部の覆土からは自然遺物が全く出土していないことから、屋内で使用されたものと考えられる。

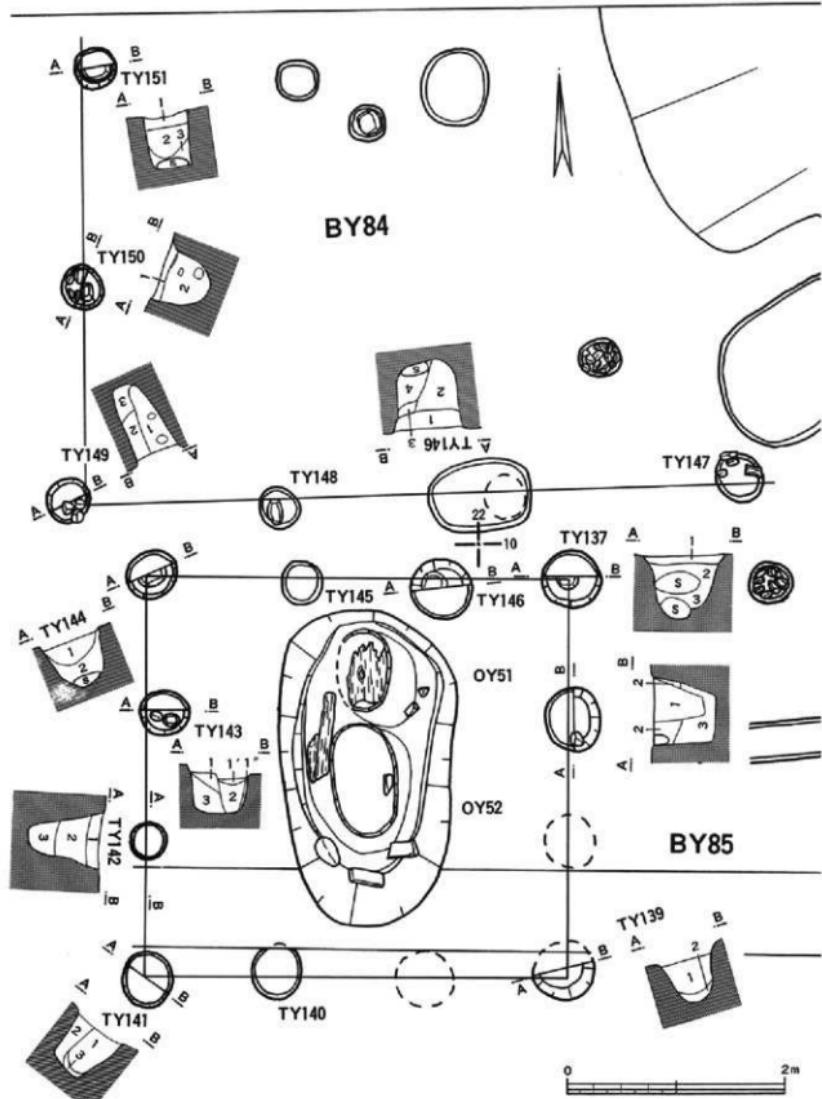
ON48・49給水施設（第22図）

調査区北側18・19-32・33Gに確認された。堀り方の平面形はON48が隅丸方形、その西側にON49が確認された。ON48は長短径1.2~1.36cm、深さ1.64mを測る。ON49の桶は抜き取られて残存しないものの、ON48とON49の間には竹水管により下部で接続されている。このON48給水施設は桶を埋設しているもので、木製の桶がほぼ完全な形で残存している。また、ON48から北側の東二の丸堀跡には木製のとよ（長さ1.8m、幅15cm、高さ10cm）が3本接続されており、約5.6mにわたり設置している。出土遺物は陶磁器、木片などがある。

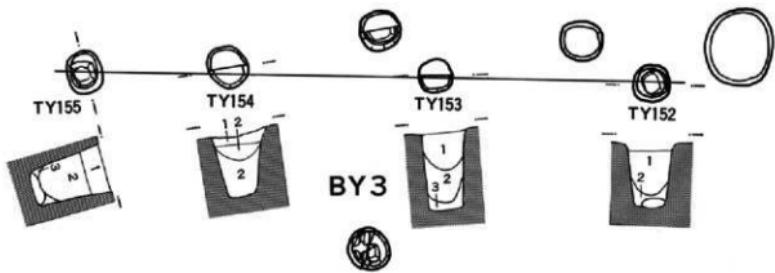
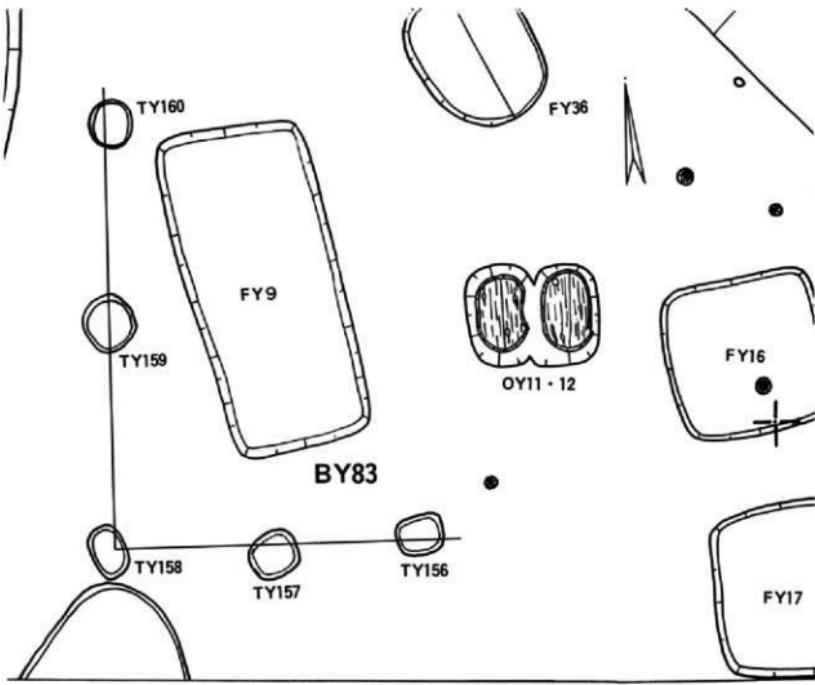
第17图 BY79-80层立壁物



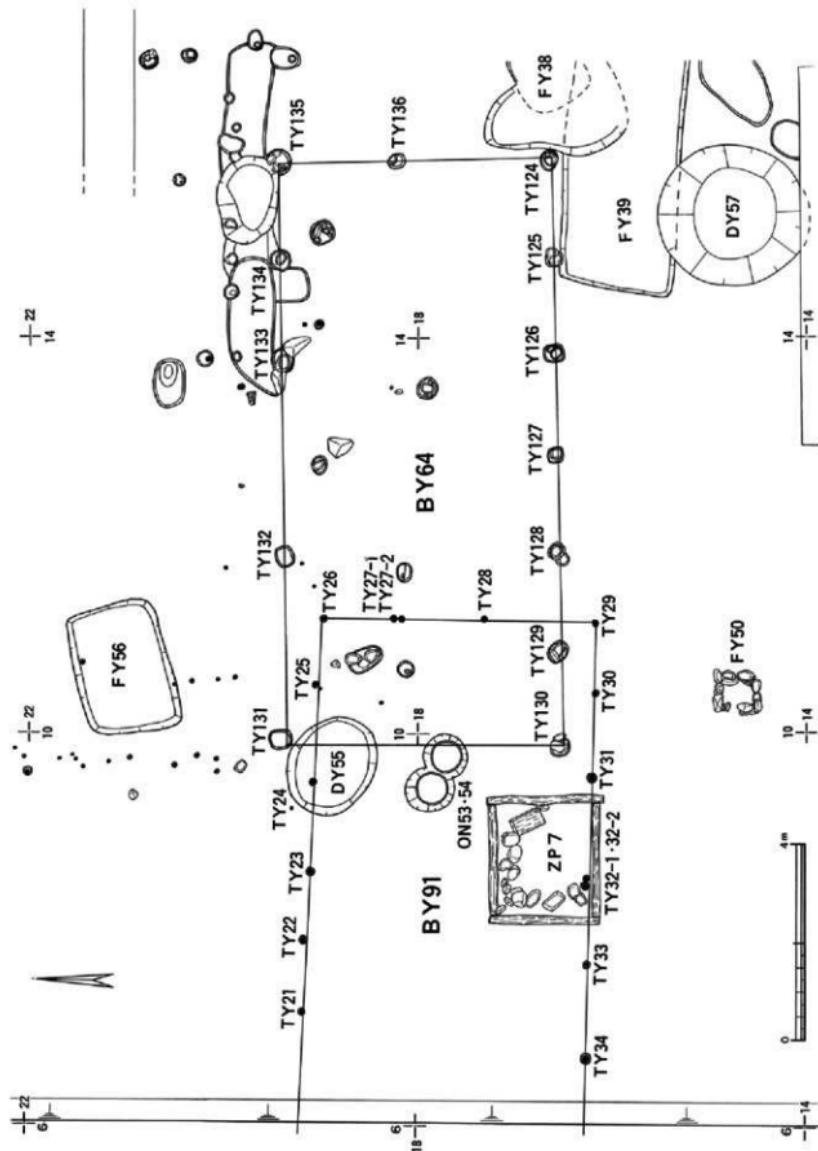
近世の基礎跡



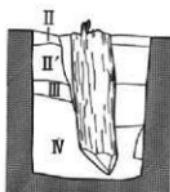
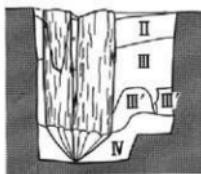
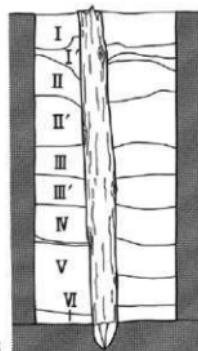
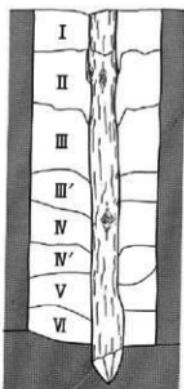
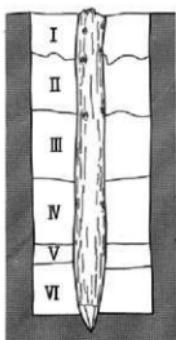
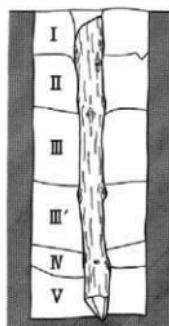
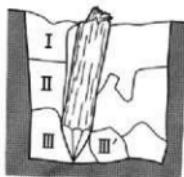
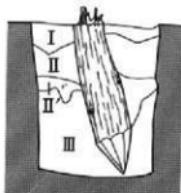
第18図 BY84・85掘立建物跡



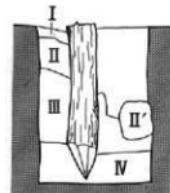
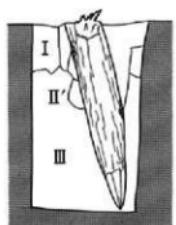
第19図 BY3・83掘立建物跡



第20圖 BY64・91獨立建築物跡



T Y 34



第21図 BY91掘立柱断面図

ON53・54給水施設（第22図）

調査区西侧9・10-18Gに確認された。ON53とON54の掘り方の平面形は、東西方向に円形を若干重複させた状態を呈し、ON53の長径1.29m、ON54の長径1.40m、それぞれ深さ1.52mを測る。双方の給水施設は同時に掘り込んでいる。またこの2基の給水施設は桶を埋設しているので、木製の桶が完全な形で残存しており、桶の下部には双方を連結する竹水管が認められる。ON53の底部には水抜き用の栓が付設する。また、ON54の下部側面には竹水管が付設し、すぐ東側には水位調整用の空気孔や調製落し板が付設している。

ON55給水施設（図版）

調査区中央部北側、KY42北側の12~25-27~32Gに確認された。桶は確認されなかったが、東西方向にほぼ一直線に溝状に延びている。確認長27m、幅約40cm、深さ約50cmを測る。溝内底部から、竹水管が確認された。この竹水管は木製角材をくり抜いたもので繋ぎを呈しているものである。繋ぎによって接続された5本の竹が認められた。竹は両先端を若干細く削っている。

NN50洗い場状石組遺構（第23図）

調査区西側15-10Gに確認された。平面形は南北長を有し、長径（南北）1.23m、短径（東西）1.12m、深さ38cmを測る。構築している礫は、20cm及び40cm前後の河原石を用いており、石の組方は、大きな礫の長軸を接続させ方形を形どり、そのすき間に小礫を埋め込み構築している。遺物は出土していない。

NN58洗い場状石組遺構（第23図）

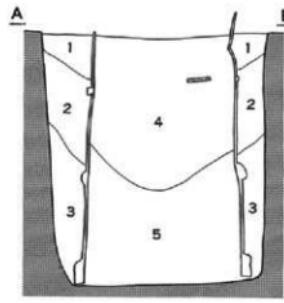
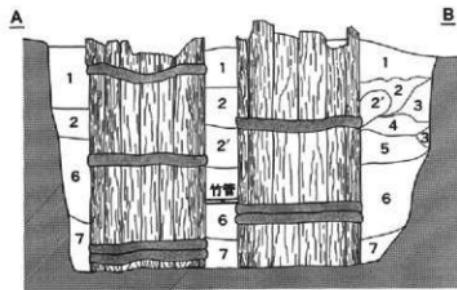
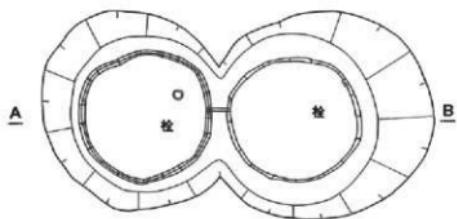
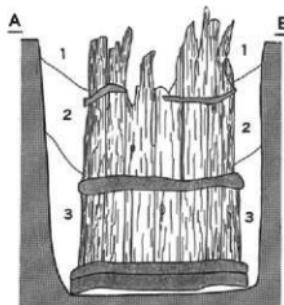
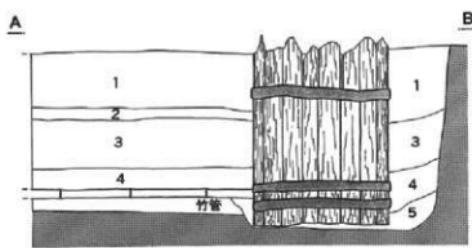
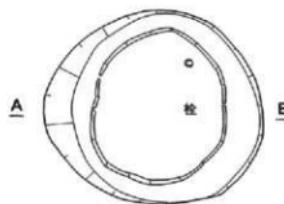
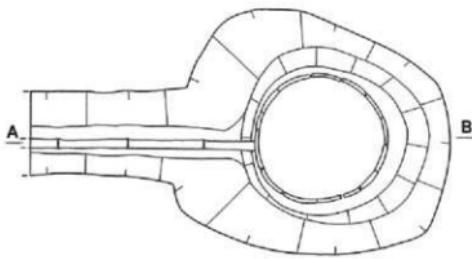
調査区西側12・13-12・13Gに確認された。平面形は南北長を有し、長径（南北）2.75m、短径（東西）2.24m、深さ43cmを測る。構築されている石は河原石であり、東側に30~50cm、南・西側は20~30cmの礫を配置している。石は壁面に、礫の長軸を接続させ方形に組み込んでいる。南側が若干原形を留めている。遺物は出土していない。

ZP6洗い場状木枠遺構（第23図）

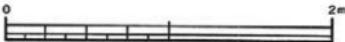
調査区西隅6-12・14Gに確認された。平面形は西側が調査区外であることから不明であるが、方形を有するものと考えられる。長径（2.75m）、短径（1.5m）、深さ48cmを測る。確認状況から判断すると、地面を方形に掘り込み、太さ約12cmの丸太材にて周囲を区画し構築していたものと考えられる。丸太の材質は不明であるが針葉樹である。遺構内には30cm前後の礫十数個と、幅30cm前後の平板材10点が認められた。また後世に打ち込んだものと考えられる大小の杭が南側に4本、北側に1本の計5本確認された。遺物は近世の陶磁器類が数点出土している。

ZP7洗い場状木枠遺構（第23図）

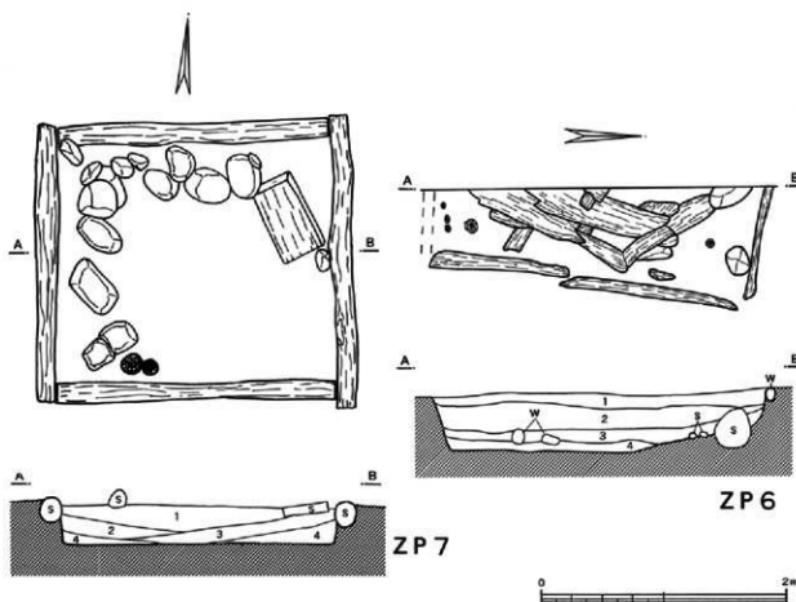
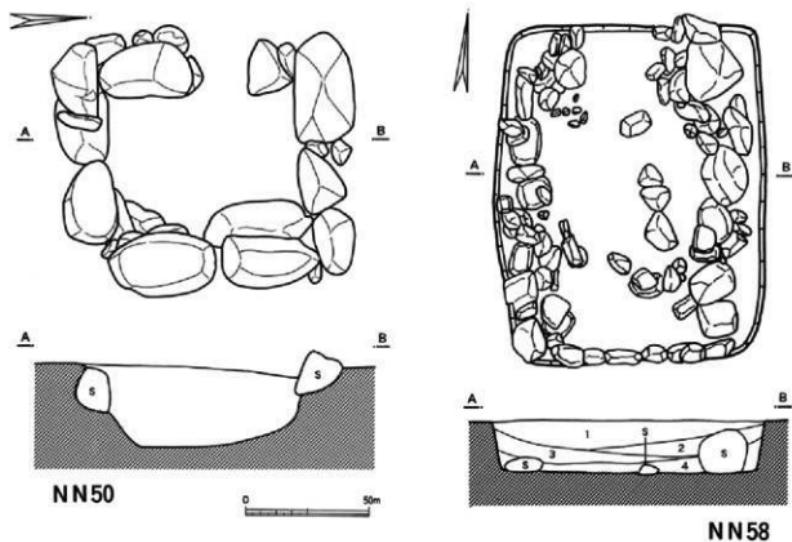
調査区西側塙面8・9-17・18Gに確認された。平面形はほぼ正方形を有し、長径（東西）2.60m、短径（南北）2.40m、深さ32cmを測る。地面を方形に掘り込み、長さ2.4m、太さ約20cm、の丸太材4本



ON 4 · 48 · 53 · 54



第22図 ON 4 · 48 · 53 · 54給水施設跡平・断・側面図



第23図 NN50・58石組遺構、ZP6・7木枠洗場状遺構

で周囲を区画し構築している。材質は不明であるが針葉樹である。遺構内には、40cm前後の礎16個と平角材1点が認められた。また南側には、後後に打ち込んだものと考えられる杭が南側に2本認められている。遺物は近世の陶磁器類が数点出土している。

O Y11・12便所跡（第24図）

調査区西側22・23・15Gに確認された。O Y11とO YN12の堀り方の平面形は、橢円形で長軸を南北方向に配置し、東西に若干重複させた状態を呈す。O Y11の長径2.38m、深さ1.30mを測る。O Y12は長径2.36m、深さ1.32mを測る。双方の便所跡は同時に掘り込んでいる。この便所跡は橢円形の桶を埋設しているもので、木製の桶が完全な形で残存している。それぞれの桶の下部の底板は二枚を張り合わせておらず、底板は桶最下部から約30cm上部に設置している。偶然であるか、双方とも底部に穿孔が施されている。それぞれの桶内底部には自然木が数本認められた。

O Y13便所跡（第24図）

調査区北西側壁面6・30Gに確認された。堀り方の平面形は、橢円形で長軸を南北方向を呈す。長径2.0m、短径1.5m、深さ36cmを測る。桶の大きさは、堀り方に接しておりほぼ同様な橢円形である。残存状況は桶の上部のはほとんどが欠損しており、下部の一部が残存しているのみである。桶の下部の底板は二枚を張り合わせており、底板は桶最下部から約20cm上部に位置している。桶内からの遺物の出土は認められなかった。

O Y51・52便所跡（第24図）

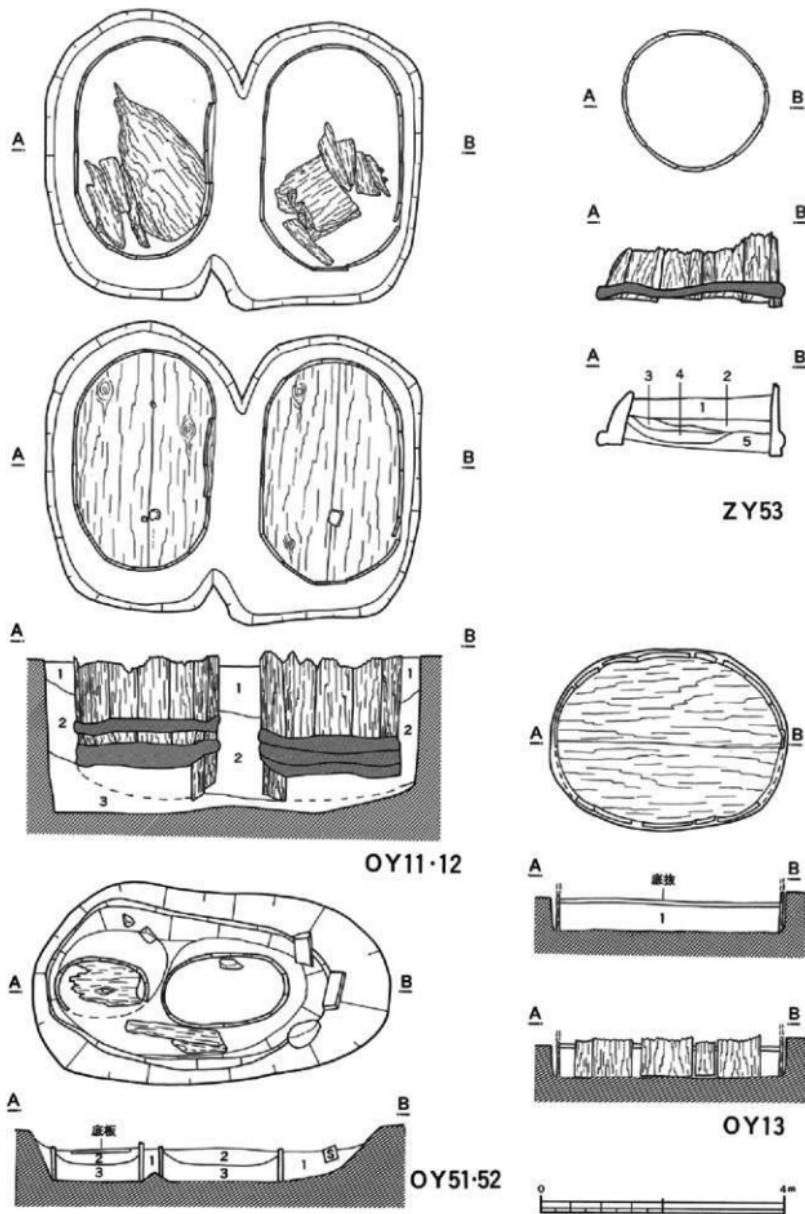
調査区南東側21・9・10Gに確認された。O Y51とO Y52の堀り方は同時である。平面形は、ON11・12と異なり南北方向に長い橢円形を呈す。O Y51（桶）の長径1.56m、短径（1m）、深さ32cmを測る。O Y52は長径2.10m、短径1.24m、深さ32cmを測る。この便所跡は橢円形の桶を埋設しているもので、木製の桶の上部は破壊されている残存している。それぞれの桶の下部の底板は二枚を張り合わせており、底板は桶最下部から約30cm上部に位置している。O Y52は、枠の桶は残存するものの下部の底板は認められない。出土遺物は堀り方桶外側に自然木が認められた。

Z Y55洗い場状遺構（第24図）

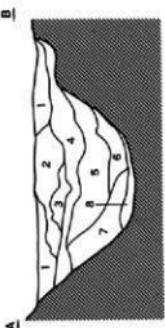
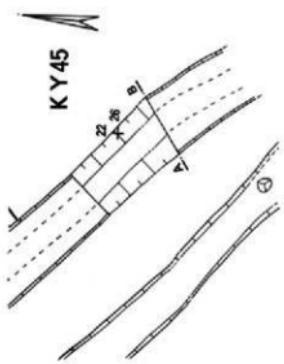
調査区西側9・17Gに確認された。O Y53はZ P 7と重複しており、堀り方は不明である。桶の平面形は円形を呈し、径1.2m、深さ32cmを測る。この洗い場状遺構は、地面に円形の桶を設置しているもので、木製の桶が完全な形で残存している。

D Y14土壤

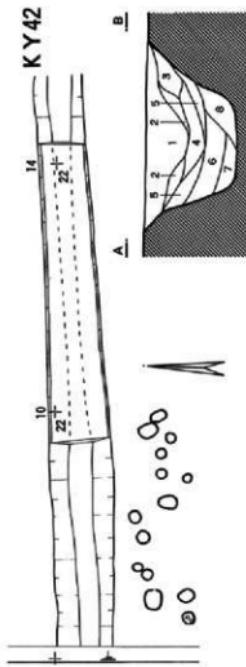
調査区南側23・25・6・7Gに確認された。堀り方の平面形は、南側が調査区外であるため未確認であるがほぼ橢円形を呈すものと考えられる。径3.14m、深さ29cmを測る。堀り方は垂直に近く、底面が平坦である。出土遺物は、覆土下層から、甲冑の草摺（胴の下部）等が破片となり出土している。

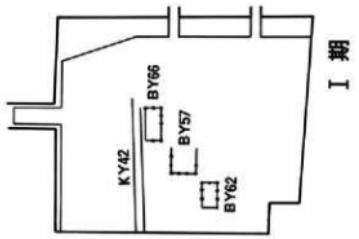


第24図 ZP53洗塗状遺構、OY11・12・13・51・52便所跡平・断・側面図

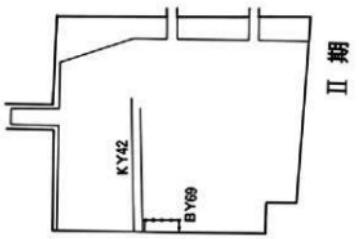


2m
0

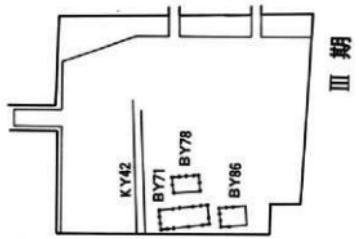




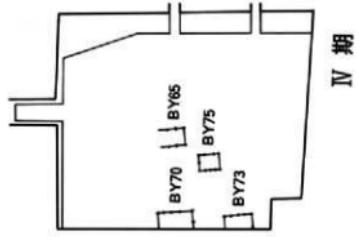
I 期



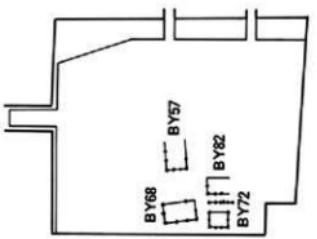
II 期



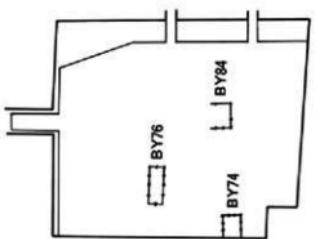
III 期



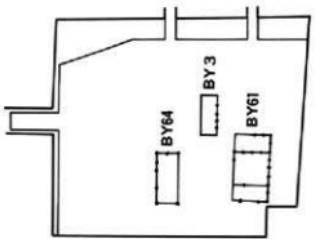
IV 期



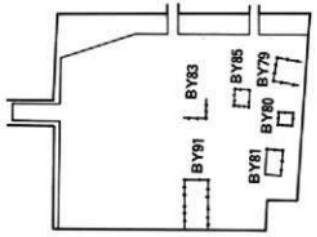
V 期



VI 期



VII 期



VIII 期

3. 出土遺物

第IV次調査で検出された遺物は、第3層、第4層を主体に、6,149点が出土している。遺物の大半は、米沢城が機能を失った明治以降現代にかけての陶磁器類が大半を占め、次いで米沢城が機能していた江戸時代全般の遺物。さらに、米沢城の創建以前と推測される中世期の遺物。そして、奈良・平安期の遺物とおまかに4時期の遺物に大別される。特に第4層面の遺構内検出の遺物は中世期に属しており、米沢城の構築に係るものとして注目される。ここでは、今回の調査で検出された遺物を年代的に分類し、簡単にその概要を述べることにする。

1) 奈良時代の遺物

第4層の下層より検出されたもので、須恵器の裏片と土師器の坏破片が6点みつかっている。すべて破片であることから明確な年代は困難であるが、笠原のⅢ期に属するものと考えられる。

2) 中世期の遺物『第27図～28図』

第4層面と遺構内からまとめて検出された。特に居館跡と推測されるK Y42の薬研堀の覆土から出土したものが大半でかわらけ27点、瓦器24点、土師質土器16点、陶磁器284点と柱痕等の木器類96点の447点がある。ここではA群土器とし、以下代表的な土器について述べる。

A群1類（第27図1～3・第28図6・7）

所謂北陸系の還元低温焼成を有した「瓦器」と呼ばれる土器群で、暗灰褐色もしくは黒褐色を呈するもで、2種類の器形が認められる。前者は内側を「く」字状に内曲させ、外面の頸部をほぼ直角に段差を有し、僅かに膨らみをもたせながら底部に向かうのが特徴で、直径が全て50cm前後と極めて大型な鉢形土器であり、口縁部から頸部にかけて印判の押圧するものが基本となっている。

印判は、2・6・7が花弁文、1が亀甲文で3のように無文のタイプも含まれている。外面はミガキやヘラ調整を丹念に施し、内面調整はヘラ調整とヘラナデによるものが多く用いられている。器形から手焙と考えられる。

後者は摺鉢状の瓦器で、太状の摺目を有するのを特徴としている。この種類の土器は、酸化焰焼成を示すのも含まっており、上浅川B遺跡や大浦C遺跡からも出土している。器形的には摺鉢と同様であるが軟質の焼成を呈していることより、別の用途に使用したものであろう。

A群2類（第27図4）

酸化焰焼成を有した内耳取手の土鍋の仲間で、器形が極端に短いことから「ほうろく」に分類される。他に内耳取手の破片も出土している。内耳取手を示す土鍋はこれまでに米沢市の大浦C遺跡を中心に15遺跡から出土しているがほうろくが確認されたのは初めてであり、内耳取手の出現を考え上で注目される。

B群土器（第28図8～14・第29図15～21）

中世期から江戸初期に属する陶磁器類を一括した。遺構を中心に300点認められ、焼成から次の7類に分けられる。

B1類（9・10・12・15・16）一戸長里窯の製品で4点出土している。戸長里窯は昭和60年に考古学

研究グループの「まんぎり会」が入田沢戸長里地区で発掘調査を実施して確認した東北最古の陶磁器窯跡である。戸長里窯の製品の出土はこれまでにも比丘平遺跡や一ノ坂遺跡、大浦C遺跡、生蓮寺遺跡等からの出土はあるものまとまって検出されたのは今回が初めてである。製品の器形は、9の壺を初め10の香炉、12の匣鉢、15の風炉、16の摺鉢がある。

B 2 類 (14) - 暗緑釉の香炉で戸長里窯より僅かに年代が後の福島県飯坂町岸窯製品で、県内では初の確認である。

B 3 類 (17・19) - 茶碗類であり、17は唐津、19は美濃系。

B 4 類 (8・11・13) - 鉢と小皿類を一括したもので、8は志野焼の鉢もしくは盤、11は染付けを配した志野焼、13はにぶい緑釉を釉薬に用いたもので、内面に菊花文を施した美濃系の小皿。

B 5 類 (18・20) - 18は外反する深鉢形の唐津で、植木鉢とみられる。

B 6 類 (20) - 鉄釉を有する越前系の大捷底部。

B 7 類 (21) - 素焼の火消壺とみられ、胴上部に8単位の有孔をもつ。

C 群土器 (第29図22~31)

酸化焰焼成を有する素焼のかわらけを一括した。いずれも暗赤褐色や暗黄褐色を有したもので363点検出している。この中には江戸時代に加わるものも含まれているが、大半は中世の範疇に属するものとみている。器形の細分から次の5類に分けられる。

C 1 類 (22) - 一絆が15cm以上を越える大型のかわらけで、口縁部がやや内曲するのが特徴である。

C 2 類 (23・29) - 外反気味に立ち上がるもので、薄手に仕上げている。

C 3 類 (24・26・27) - 底部が厚みをおび、器高が低いのを特徴としている。

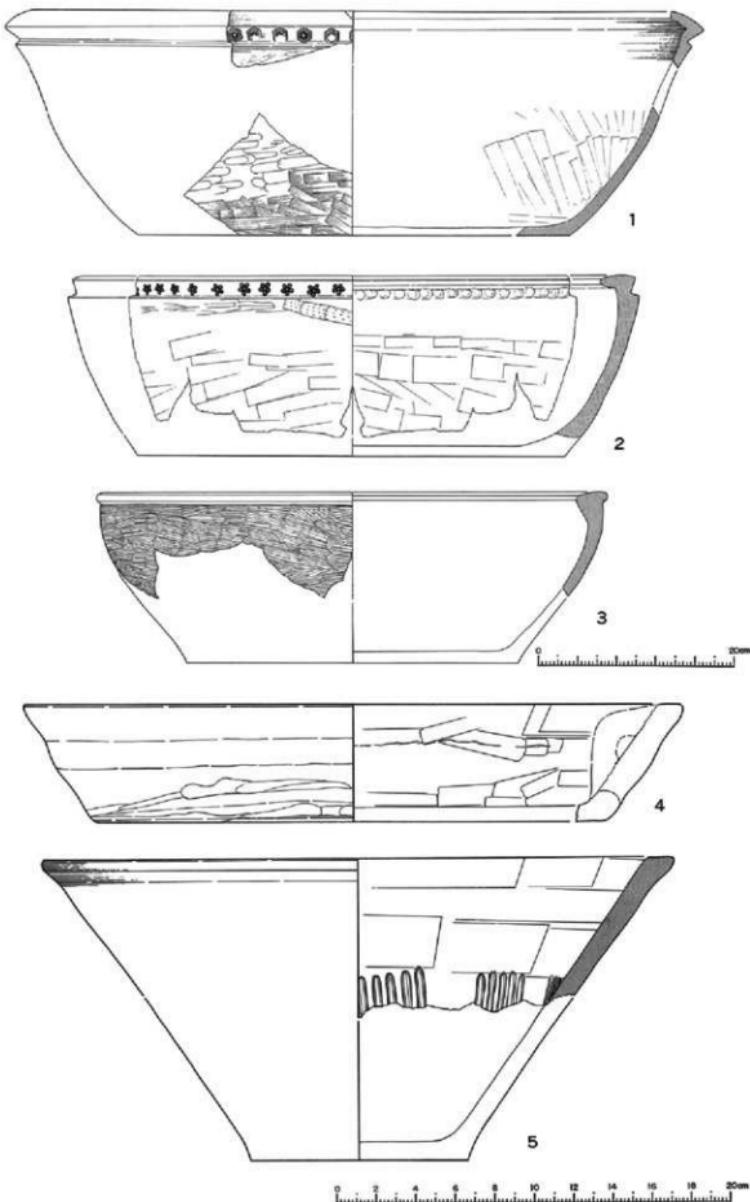
C 4 類 (25・30・31) - 口縁部付近が外にゆるやかに膨らみ、胴部が曲するもので煤が内部に付着しているものが多くみられる。灯明皿に使用されたものである。

C 5 類 (28) - 短器高のかわらけで、直角に口縁が立ち上がるのを特徴としている。

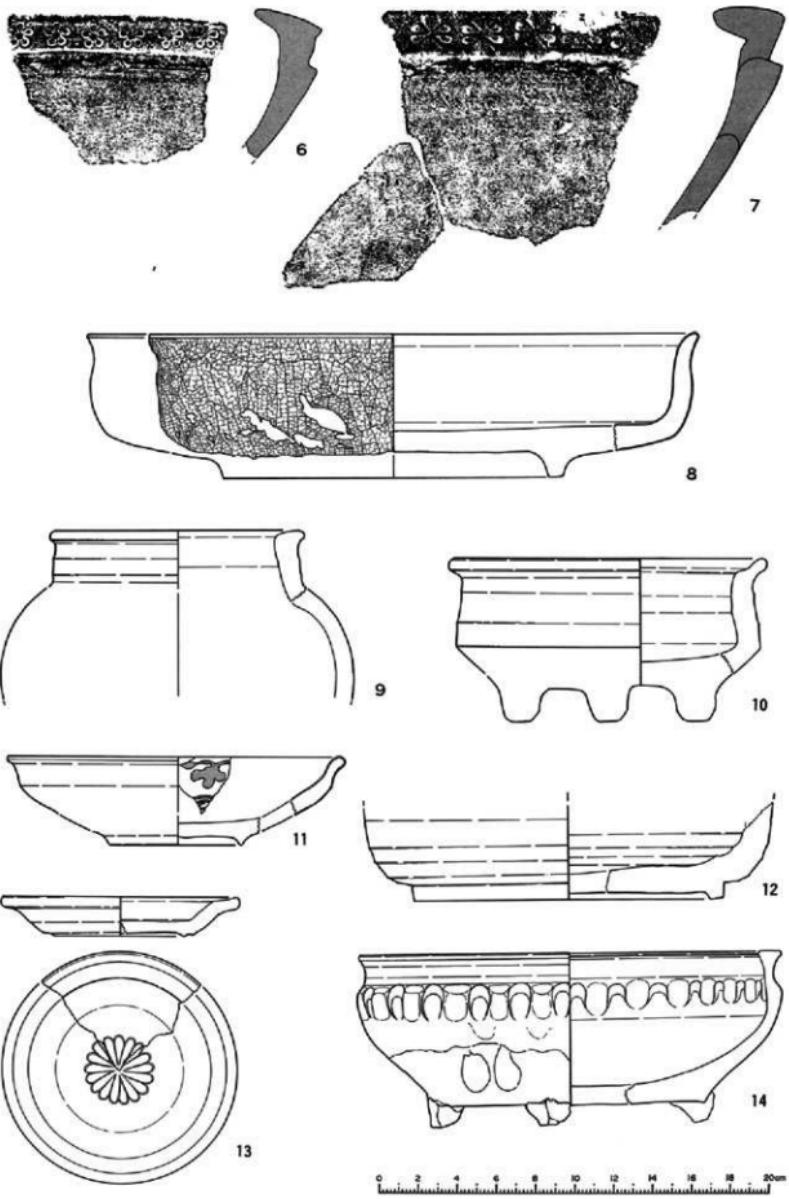
3) 近世の遺物『第30図』

今回の調査で最も多く認められたもので、大半は陶磁器類で5,426点、次いで二の丸の堀跡や土壙等の遺構から検出された下駄、漆器椀などの木器と土壙内部に捨てられた鎧の部品などが76点。櫛や柱、枕などの木製品183点。便所や給水施設に使用された桶などが8点の計5,696点が検出されているが、ここでは陶磁器について説明を加えたい。

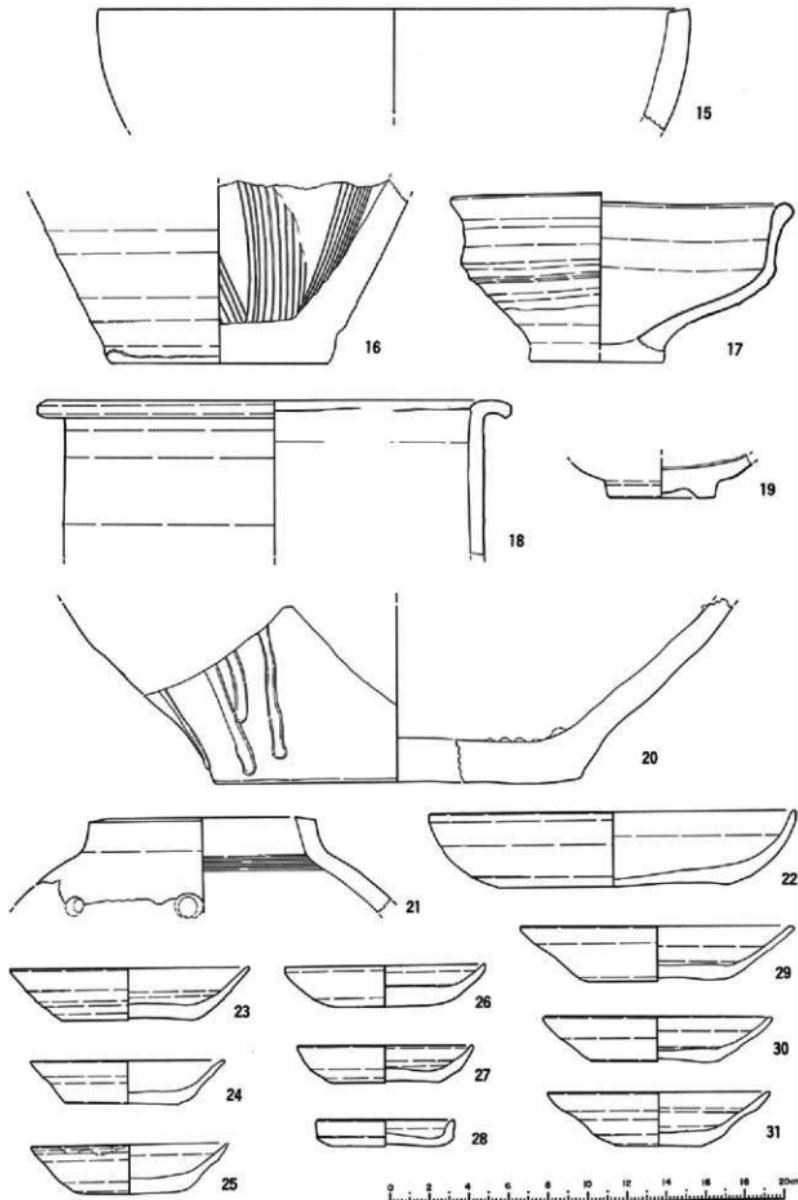
陶磁器は地元の成島焼を初め、平清水、相馬、上三宮、伊万里、美濃系の皿、茶碗、鉢、壺、徳利などの日用品が主体となっている。主なものを挙げれば、32~35は染付碗で、全体がコバルト発色のねずみ色を呈し、具須は薄青黒色で雪輪梅文(32・33)と網目文(34・35)を描いている。器厚は厚手の作りで、比較的重みがあり、九州伊万里、波佐地方の「くらわんか手」と呼ばれるもので、17世紀後半頃の所産と考えられる。口辺内部の内曲帯を特徴とする36・37・39は幕末から明治初期のキッタテ(突煙具)で在地成島焼と考えられる。38は相馬焼の碗で明治前半、40は18世紀中頃の美濃系摺鉢、41は銅釉が還元して赤褐色を呈した17世紀後半頃の鐵部焼の鉢で、口縁部が頸部で外反し、胴部から底部にかけてゆるやかに丸みをおびるのを特徴としている。



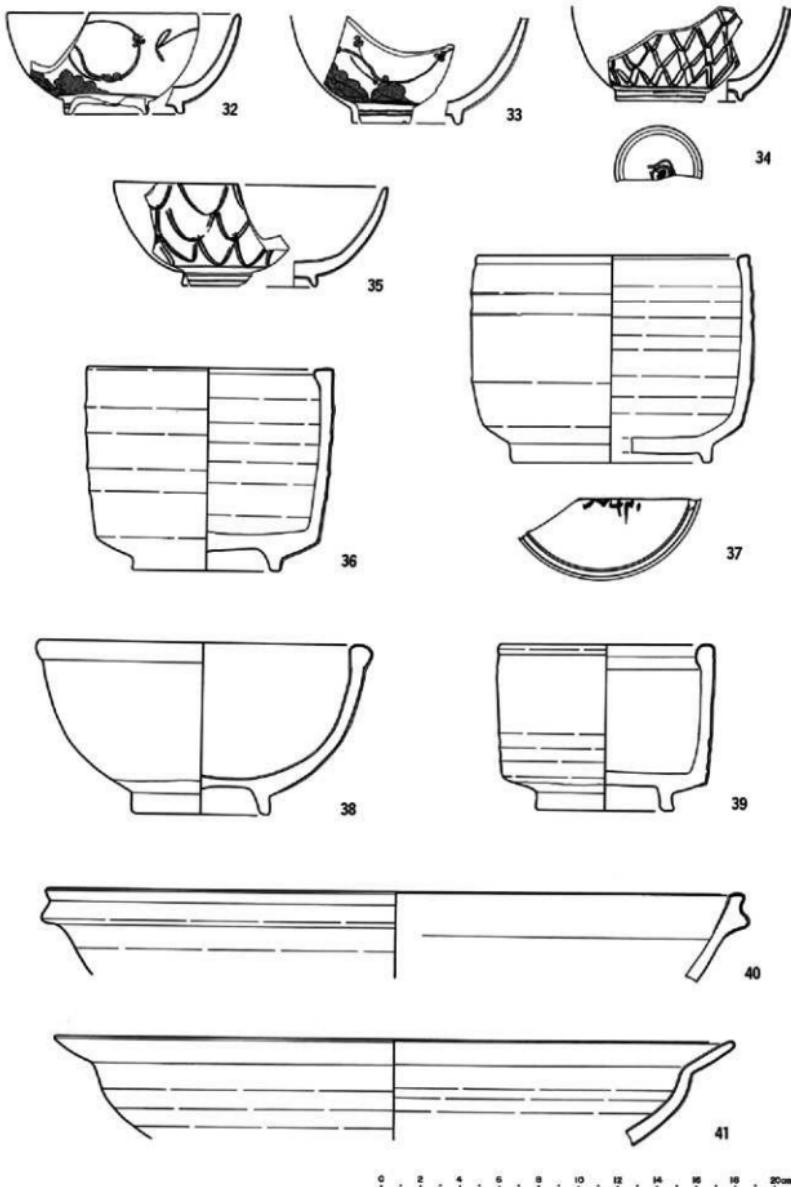
第27図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)



第28図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)



第29図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)



第30図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)

第5節 第V次調査（北二の丸跡）

1. 調査の経過

今回の調査は、公衆トイレ建設に伴う緊急発掘調査である。米沢城北二の丸跡に位置し、第IV次調査区（東二の丸跡）北西側100mに隣接し、元は砕石が敷かれている駐車場としていた所である。

現地調査は、平成3年9月23日から同年10月7日までの述べ14日間実施した。調査面積は約150m²である。

開発予定地内の遺構確認面の深さは、第IV次調査などによって表土下1m以上あることがわかつていたことや砕石などが覆われているため重機により表土剥離を行った。翌日から面整理、面精査を実施した結果、3層面の表土下70~100cmにおいて、焼土や炭化物などを含む整地層が確認された。掘り下げをつづけた結果、5層上面が地山面であり遺構、遺物が確認された。順次遺構の掘り下げ、遺物の取上げ、写真撮影などの記録作業を進めた。

本丸堀と道路を挟んで隣接していたこともあって、調査区内には水が湧き出て、排水作業には困難を要した。10月7日に機材を撤去し現地調査を終了した。

2. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構には、掘立建物跡1棟、土壙3基、溝跡2基、柱穴、不明ピット24基などがある。これらの遺構はすべて5層上面に確認されたものである。小範囲であることから、柱穴によって建物跡を明瞭に構成するものではなく、また柱穴で柱の痕跡を確認したものもなかった。以下、確認された遺構について述べたい。

BY 1（建物跡）

調査区北側に確認された。桁行東西4間、梁行南北2間を呈し、柱間1.8~1.9mを測る。掘り方は上部がほとんど削平されており確認されなかつたが、20cm前後の少疊が數十個まとまっているものと散乱して確認したものがあり、その平面形は50cm前後の橢円形を呈している。中央部でKY 2、東側でKY 3と重複しており、KY 2・3を切る。N-11°-Eを示す。

DY 5（土壙）

調査区中央部西側に確認された。平面形は不整形を呈し、径83~140cm、深さ45cmを測る。掘り方はほぼ垂直になつておらず、底部は平坦である。覆土は3層からなる、自然堆積である。出土遺物は認められず有機物のみである。

KY 2（溝跡）

調査区中央部のBY 1中央、南北方向に確認された。平面形はほぼ一直線であるが、中央部で若干東側に蛇行する。確認長10.5m、幅28~42cm、深さ37cmを測る。掘り方は垂直で底部は平坦である。南側

から北側方向にかけて緩やかに低くなっている。覆土は3層からなっている。BY1中央部で重複しておりBY1に切られている。出土遺物は認められない。

KY3（溝跡）

調査区東側BY1東側、南北方向に確認された。平面形は一直線であり、確認長4.8m、幅15~20cm、深さ24cmを測る。掘り方はほぼ垂直で底部は平坦である。覆土は2層からなっている。BY1東側と重複しておりBY1に切られており、南側は搅乱されて不明である。出土遺物は認められず有機物のみである。

ON4（柵列）

調査区中央部BY1南側梁行の直ぐ南、東西方向に確認された。柵列は一列に規則正しく、約30cmの間隔を呈し、確認長6.5mを測る。杭は数面ある不整形な角杭であり、長さ約1m、太さ10cm前後を呈し上部は尖っている。杭は50cm前後を差し込んでおり、上部に50cm前後確認されている。BY1南側平行と接近していることからBY1（建物跡）の後に構築されたものと考えられる。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は近世、近代のものである。その大半は近代に属する遺物で、整理箱で約7箱出土した。ほとんどが4層下面の整地層及び5層上面覆土から出土したもので、遺構内からは出土していない。以下、出土した主な遺物について概述する。

〈近世の遺物〉

近世の遺物は、5層上面の覆土から出土したが多く、4層下面の整地層からの出土は僅かである。陶磁器の鉢類・小皿・碗などがある。碗では外面に網目文様の伊万里系のものが多い。器厚は、厚手の作りで比較的重みがあるものである。以上の遺物から、江戸初期から中期頃と判断される。

〈近代の遺物〉

近代の遺物は、5層上面の整地層からの出土が主体である。陶磁器の鉢類・小皿・碗、石製品の硯・消板、木製品は、(漆器椀・箸、板状・棒状木製品)などがある。

2点出土した漆器椀GZ2、GZ3は黒漆による彩色である。器形の整形はロクロにより製作されたもので、口径7.3~10.2cm、器高5~8cm、底径約7cmを測る。GZ2底部外面には「竹」の字が刻み込まれている。

第6節 総 括

今回の米沢城跡発掘調査報告書は、平成元年度の本丸の石垣設置に伴う第2次調査から第5次の公衆便所建設に亘る調査までを一括したものであり、謎の米沢城の解明に大きく寄与したものといえる。米沢城の創建期に関しては、1. 長井氏（長井時広）創建説、2. 伊達氏（伊達晴宗）創建説、3. 蒲生氏（蒲生氏郷）創建説、4. 上杉氏（上杉景勝「直江兼続」）創建説の4説が周知されている。この中で確実に米沢城を本城としていたのは上杉氏であることは周知の通りであるが、蒲生氏に関してはほぼ妥当と考えられる。その点も考慮しながら、発掘調査で明らかとなった成果についてまとめてみる。

まず第一に米沢城周辺における歴史的事実関係について触れば、第1次、第4次、第5次の調査において第5層面から中世期の遺構と遺物が検出されている。遺構は第4次調査の対称となった東二の丸跡からまとまって検出されたもので、14世紀中葉から16世紀後半期の掘立建物群と烟跡等が確認されている。特に掘立建物跡は、大字上浅川の上浅川B遺跡、中田町の大浦C遺跡らと共に通るもので、円形プランを主体にした建物が8時期に亘って存在している。建物はKY42の薬研堀で区画した内部に配置しているものであるが、調査区が限定していることや調査区の大半が後世の搅乱を受けていることもあって、建物全体の配置構成は明確に出来なかったがKY42の状況から判断すると半町四方の単郭式館跡とみるべきである。

さらに、KY42内部の覆土と建物の配置、規模からもある程度の推測が可能で、I期に成立した建物がⅣ期に入るとBY61に代表される様に大規模な母屋として成長するが、VI期以降は社会変化（室町幕府の成立から解体）の影響を受けて徐々に建物群が縮小して行くことが確認された。米沢城もその例外でないことが証明されたものといえる。

このことは、既に現在の米沢城周辺に相当大規模な中世集落跡が成立していたことを物語っており、こういった背景基盤の中で所謂「初期米沢城」が成立したと想定されるが、これまでの遺構の分析内では各たる根拠とはならないものである。

遺物では、日本海側の中部、東北南部にかけて分布する低温焼成を有した還元焼鉢形土器が検出している。鉢は内部に櫛目状の凹線を數条を規則的に配した所謂「須州系櫛鉢」と同じ形状をもつのが特徴で、米沢市内では上浅川B遺跡、我妻館跡、大浦C遺跡で検出されている。搬入遺物の可能性が高く、14世紀前後の所産と考えている。他に越前焼、初期美濃系の小皿、初期志野焼等から想定すれば、14世紀前半から16世紀後半期まで中世の集落が存在していたものと推測される。

第2に江戸時代、つまり上杉氏に係る米沢城の遺構であるが、旧地方事務所等の建設によってほとんどが破壊されている。一部、土壙や木枠を配列した方形施設や用水施設、便所跡等の一部が検出されている。このなかで、用水施設となる飲用水を城内に給水した遺構として、水管の役割を果した竹水管と接続板、貯水槽の役割をする桶、給水の調整をする調整施設などが組み合わせて発見されている。これらの給水施設は、江戸城の大名屋敷などからも最近数箇所確認されており、東北地方に関しては初めての発見となる。出土遺物が含まれていないことから詳しい年代は明確にできないが、上杉氏（直江兼続）が米沢城の整備を着手してまもない時期と思われる。

最後に米沢城の本丸内部に打ち込まれた杭列群について触れておく。杭列群は、基本的に本丸の土壘直下、2尺程堀側に空間を設け、さらに2条の杭列を合わせた3条の杭列で構成しているもので、土壘寄りは杭の先端部が平な打ち込み杭であるが、堀に面した2条の杭列は先端が尖状を有する特徴を示している。尖状をなす杭は、乱杭と称される施設であり、古くは弥生時代の環濠集落の防備として利用されてきたもので、中世の城の構築にとどまらず堀内から侵入する敵の防御施設として盛んに使用されたものである。これらの杭列群は、後世の石積によって部分的に破壊された箇所もあるが、ほぼ全城に認められ、最も良好に確認される杭列には後世によって修復したと推測される細い乱杭もかなり存在することから、周期的に補強工事を行っていたものと予測される。

杭列の年代としては、最下層と北東の土壘内部から出土した「かわらけ」の形態から17世紀前半に求められるすれば、上杉氏の城普請の際に施工されたと考えるのが妥当といえる。現在、城跡から乱杭が確認された例としては、青森県の弘前城、同浪岡城、福島県鳴山城跡があるが、全体の構造が明瞭に確認されているのは米沢城が唯一であり、平城を研究する上でも極めて貴重な資料となる。これらの杭列は、その重要性を鑑み工事の設計変更をし、遺構に影響の及ぼさない工法を駆使して現状保存を行っている。

以上、一連の米沢城に係る調査成果を列記したが、当地における先人の痕跡は、概ね14世紀から營まれたものといえる。さらに、数点ではあるが縄文時代の石器や奈良時代から平安時代の須恵器の破片も出土していることから今後の調査によっては、同時期の遺跡が発見される可能性もある。中世期の遺跡は現在までの宅地等の開発に伴う試掘調査の資料を基に推測すれば、米沢市内の中世に係る遺跡群の中でも最大規模となる約15万m²の範囲に及んでいると推測される。この大規模な聚落跡は、どのような背景で成立し、その機能は単なる聚落範囲では解決できないものといえる。

これまでにも触れたように米沢城の創建期に関する考え方方は、長井、伊達、蒲生等の説が存在するよう論争的となってきた。今回の調査で確認された成果が直接、これらの問題を解決する資料とは成らないまでも、今後の研究を進める上で大きな手掛かりを示したといえる。これからは、さらに米沢城の解明に向け、より一層の調査努力を実施する所存である。

参考文献

- 米 沢 市 1944 「米沢市史」
中 村 忠 雄 1966 「米沢里人談」
小 野 荣 1987 「伊達と米沢」
小 野 荣 1987 「米沢の町人まち」
手 塚 孝 1992 「快風17号」御堀端史跡保存会
米沢市教育委員会 1987 「宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書第1集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第19集
米沢市教育委員会 1991～1994 「遺跡詳細分布調査報告書第4～7集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第28・32・37・42集

写 真 図 版

第一回版 本丸跡トレンチ調査状況（第二次）



▲Bトレンチ（北から）



▲Bトレンチ（北から）



▲Cトレンチ（北西から）



▲B・Cトレンチの中間（西から）



▲Dトレンチ（北東から）



▲Dトレンチ（北から）

第二回版 本丸跡トレンチ調査状況



▲ TNo. 1 (東から)



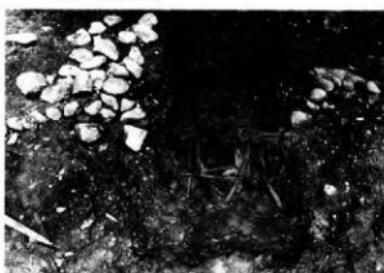
▲ TNo. 2 (東から)



▲ TNo. 3 (南から)



▲ TNo. 4 (南から)



▲ TNo. 5 (南から)



▲ TNo. 6 (南から)



▲ TNo. 7 (西から)



▲ TNo. 8 (西から)



▲No.9 (西から)



▲No.10 (西から)



▲No.11 (北から)



▲No.12 (北から)



▲No.13 (東から)

第四図版 米沢城東二の丸跡調査区全景



第五図版 米沢城東二の丸跡遺構検出状況

▲ ZP7坑遺構検出状況 (東から)



▲ OY11・12便所跡 (西から)

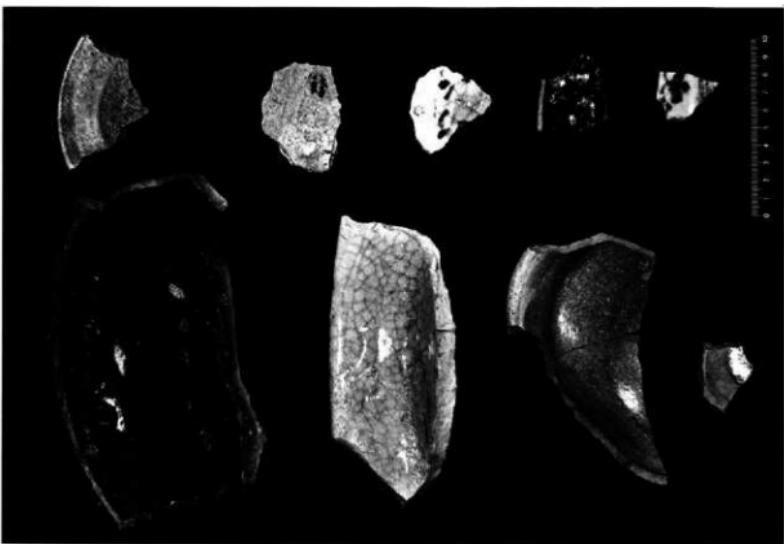
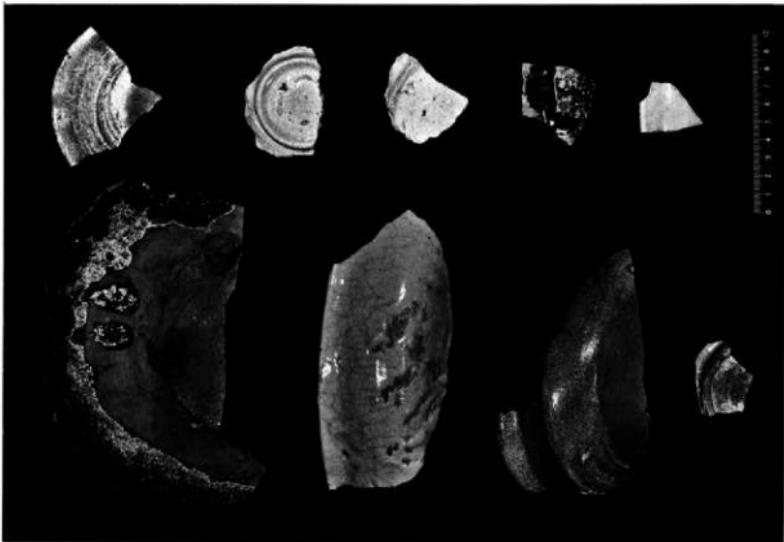


▲ OY11・12便所跡 (南から)

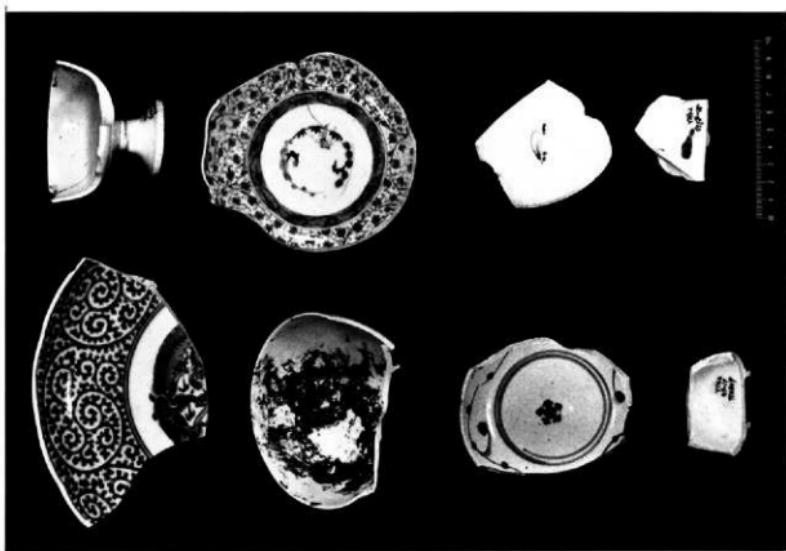
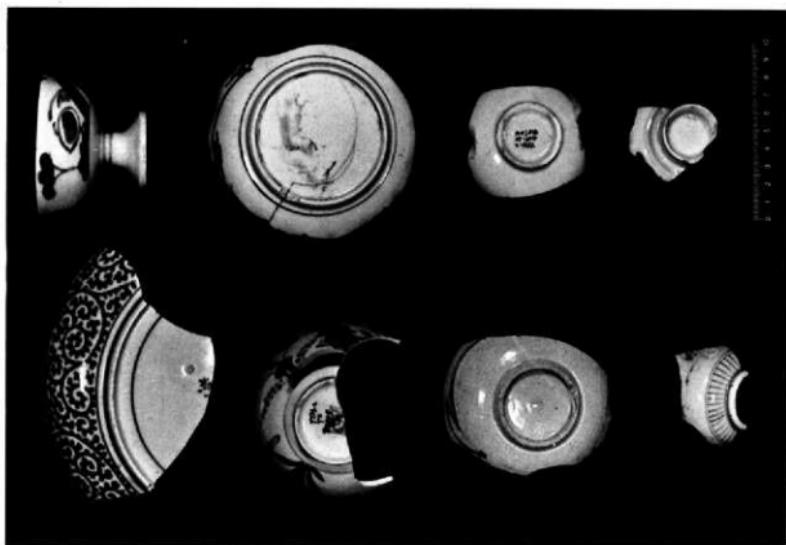


▲ ZP8坑遺構検出状況 (東から)

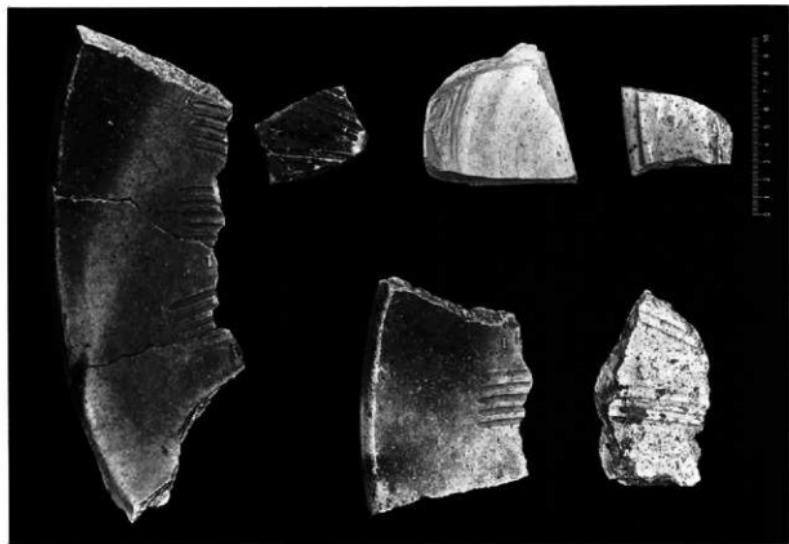
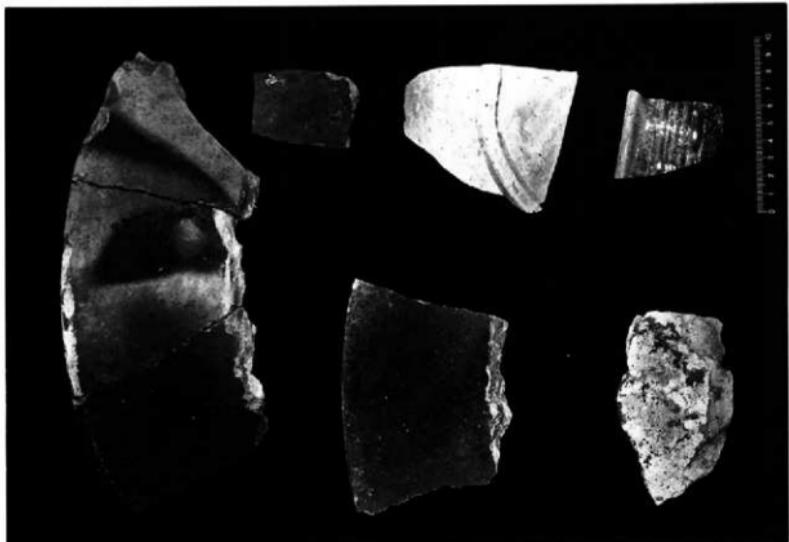
第六図版
米沢城東二の丸跡出土遺物（一）



第七図版 米沢城東二の丸跡出土遺物（2）



第八図版 米沢城東二の丸跡出土遺物(3)



第九図版 米沢城東二の丸跡出土遺物（4）

